

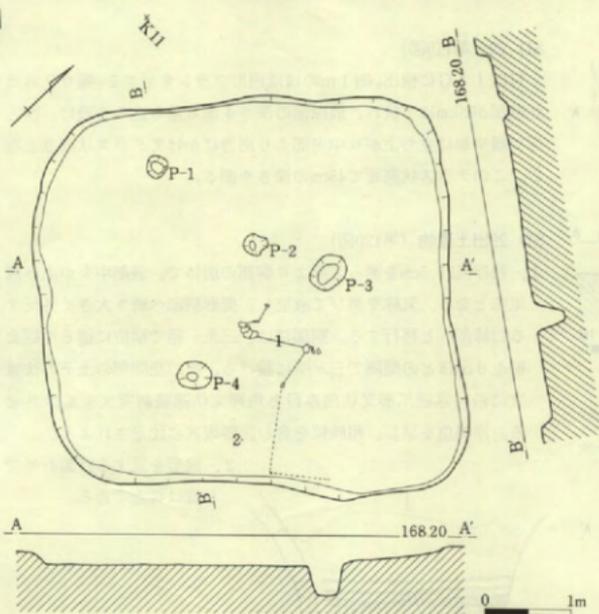
3. H・I区

(1) 検出した遺構と遺物 (第114図~158図)

H・I区で検出された遺構は、縄文時代の堅穴住居址 (SH 8) が1軒、土坑 (SD28~51) が24基でその中に陥穴と称されるものが5基検出されている。近世の井戸址等も検出された。

SH 8 (第116図)

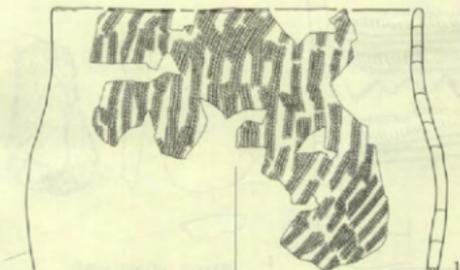
本住居址はH区J11、K11Gに跨り検出された。平面形は東方隅がやや突出して歪隅丸方形である。長軸がN-41°-Eを呈し長軸長4.8×短軸長4.6m前後を測る。床面はさほど踏み固めていないロー



ム面ではほぼ平坦である。ピット状掘り込みは4ヶ所検出されたが、P-1とP-2は25cm前後の円形気味プランで10cmほどの深さである。P-3は45×35cmの楕円形で深さ40cm、P-4は40×30cmの楕円形で深さ35cmを測る。本住居址の炉址等は検出されない。

遺物出土状態は中央部やや東方から南東壁沿いに出土した同一個体片と磨石のみであった。

第114図 SH 8 平面図



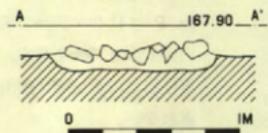
第115図 SH 8 出土遺物

SH 8 出土遺物 (第117図)

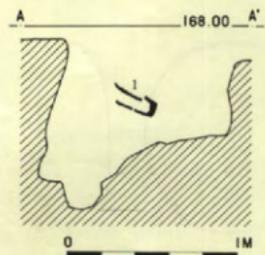
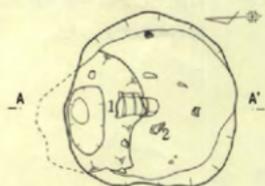
1. 直立気味に内湾する胴部より直立する口縁部へ移行する個体で推定口径29cmを測る。胎土中には繊維を含む。器面には口唇部より縦位で単軸絡条体の縄文を充墳する。
2. 安山岩質の磨石で表裏面を磨面とし、中央部に点状痕と短形に似る凹孔を残す。

SD 28 (第118図)

H区L3Gに検出された集石を伴う土塚で、約1mのほぼ円形プランを呈し、深さ12~13cmの掘り込みを測る。集石礫は5cm前後~28cmほどの長さを測り、火受けにより赤面化する礫も見うけられる。礫の多くは、台状気味の角礫である。覆土はカーボン粒、焼土粒を含む黒褐色土である。



第116図 SD28平面図



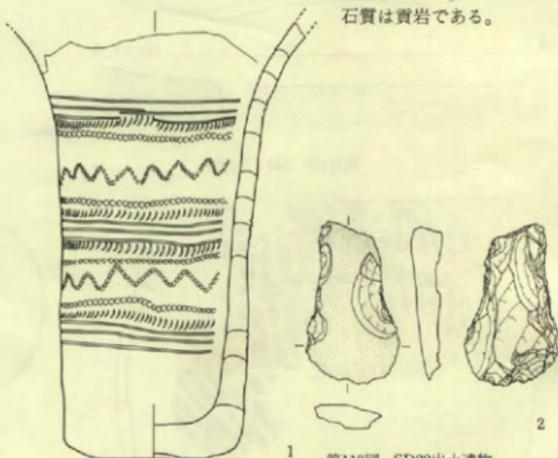
第117図 SD29平面図

SD 29 (第119図)

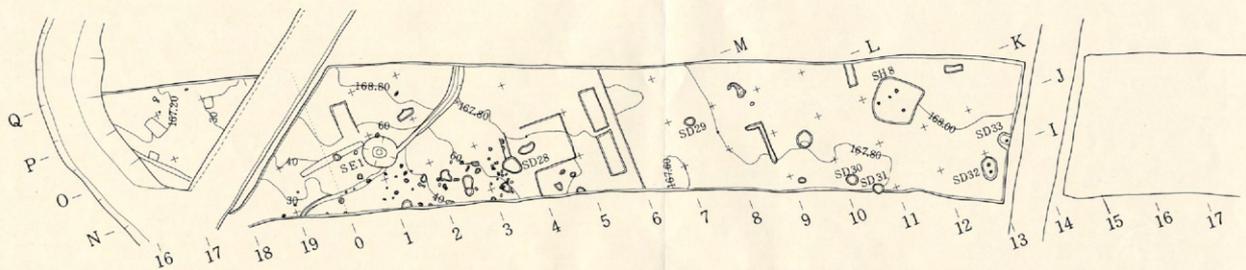
H区J7Gに検出。約1mのほぼ円形プランを呈する。掘り込みは北壁部が20cmほど抉れ、最深部の深さを測る落ち込みを設け、南方部で緩やかに立ち上がり中央部より南方にかけてテラス状底面となる。このテラス状底面で45cmの深さを測る。

SD 29出土遺物 (第120図)

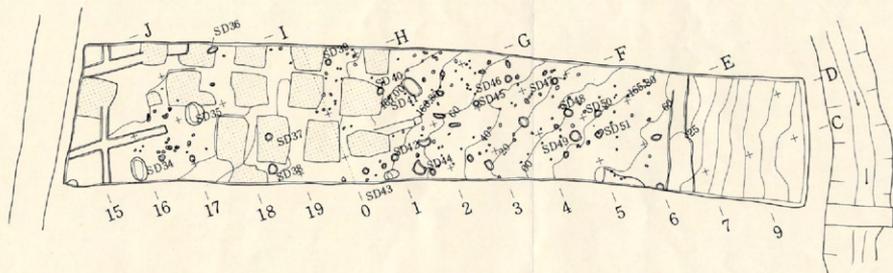
1. 残存長25.5cmを測る底部より胴部の個体で、底部中央が上げ底気味となる。丸味を帯びて直立し、筒形胴部へ続き大きく外反する口縁部へと移行する。胴部には、三条一組で横位に廻る沈線文帯を6cmほどの間隔で三ヶ所に設ける。その空間部の上下の沈線文に沿い連続爪形文状刻み目と角押文状連続刺突文を並走させる。赤褐色を呈し、粗砂粒を含む。勝坂式に比定されよう。
2. 撥形を呈する打製石斧で石質は頁岩である。



第118図 SD29出土遺物



第119图 H区全体图



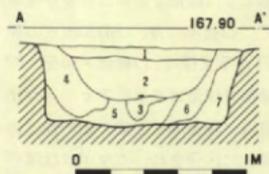
第120图 I区全体图

SD 30 (第121図)



HI10Gの西方に検出され、南東方向にSD31が隣接する。長軸がN-27°-Wを呈し、長軸長1.23×短軸長1.14mを測る楕円形で西部がやや歪みをもつ。掘り込みは西部を除き垂直気味で、底面は緩やかな凹凸があるがほぼ平坦である。

出土遺物は覆土中のものが大半で、細片が多く図示したものは把手の二点である。



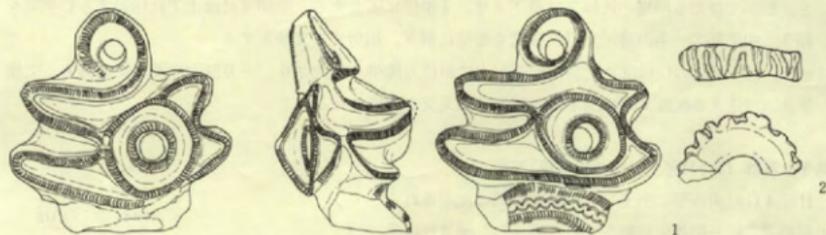
SD 30土層説明

- | | |
|-----------|---|
| 1 暗褐色土 | 2層、6層よりも明るい。カーボン粒を含む。 |
| 2 暗褐色土 | 1層より多く、カーボン粒を含む。 |
| 3 暗褐色土 | 2層よりもハード。焼土粒を含む。 |
| 4 暗褐色土 | 2層よりも明るく、ローム粒を含み、カーボン粒を多く混える。ロームブロック粒を斑点状に含む。 |
| 5 褐色土 | 4層に似る。4層よりもカーボン粒が少量。 |
| 6 暗褐色土 | ロームブロック粒を含む。 |
| 7 におい黄褐色土 | |

第121図 SD 30平面図

SD 30出土遺物 (第122図)

- 所謂、双孔のみみずく状把手で、表裏面が対称形に似る文様を呈する中空把手で、同心円形より角先状モチーフを左右に配し、先端部に環状を付す。モチーフの輪郭は隆帯となり、同心円の一部、または角先状輪郭の一部より一筆描きの様に先端部の環状部まで続く。隆帯上には細かく爪形文を連続させる。胴部との接合部には連続爪形文間に半截竹管による連弧文を施す。勝坂3式後半の所産。
- 環状把手の一部で、上面に粘土紐を葛折り状に連続させて貼付する。

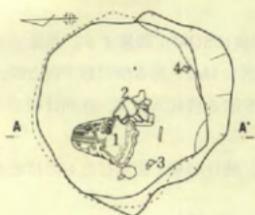


第122図 SD 30出土遺物

SD 31 (第123図)

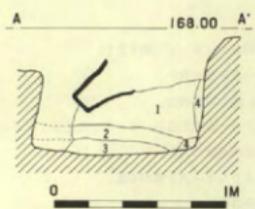
HI10Gの南方、路線ぎりぎりに検出され、1.05m前後の径を測るやや歪んだ楕円形を呈する。平坦な底面より南方部の一部を除いて5~10mほどオーバーハングする掘り込みで、南方部で深さ65cm前後を測る。

遺物は、覆土第一層中に出土し、総てが中期の勝坂式に比定される。



SD 31土層説明

- | | | |
|---|--------|------------------|
| 1 | 暗褐色土 | 多量のカーボン粒を含む。 |
| 2 | ふよい褐色土 | 斑点状にロームブロック粒を含む。 |
| 3 | 暗褐色土 | ハーフ。 |
| 4 | ローム | |



第123図 SD 31平面図

SD 31出土遺物 (第125図)

1. 底部よりやや外反して開く胴部より口縁部でさらに外反を強め、口唇部を平坦にする円筒形深鉢で、口唇部には、SD30出土の環状把手が付されていたのであろうか？文様は、口縁部・頸部・胴部文様帯の3段に区分され、口縁部文様帯は8単位でカマボコ状隆帯を8ヶ所に設け、隆帯上に縦位、隆帯間に三条一組で横位の沈線文を施す。頸部文様帯は2単位に区分され、カマボコ状隆帯より6の字状の把手を2ヶ所に付す。把手上面には粘土紐により

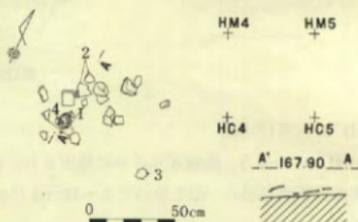
円形文を上下に、その間を横位と斜位に貼付する。この把手部には楕円状区画文を施し、把手間の中央部には渦巻文を描く。楕円状区画文内には、列点状と横位の沈線文を施し、渦巻文間の逆台形空間部には、縦位・横位・三叉文を沈線文で描く。頸部と胴部の文様帯は一条の隆帯で区分され、把手部より垂下する二本一組の隆帯により2単位に文様を分け、渦巻文を基調として、三叉文等を空間に沈線文で描き、充填する。

2. 底部より直立する円筒形胴部となり、キャリパー形に内湾する口縁部へ移行する。器面全体に縄文の地文を斜位・横位で充填し、二条一組の連続爪形沈線文を横位に並走させ胴部と口縁部文様を区画し、胴部文様帯も同様の沈線文で垂下させ、4単位に区分する。空間部には上下に相対するU字文を描き、中央部で一条の連続爪形沈線文を縦位に繋ぎ、相対する文様とする。
- 3～5. 同一個体の口縁部片で、山形突起上に斜位の隆帯を並走させ、一方側面に渦巻文を施す。文様帯は、並走する沈線文間に上下に交互して三叉文を連続させる。

第1土器群 (第124図、出土遺物 第126図)

H区4Gの南西部に出土した中期勝坂式に比定される土器群で、同一個体片が散在する。出土した個体片は底部より口縁部下半に位置する。平坦な底部より円筒形の胴部に移り、外反して開く口縁部に移行する。

胴部には小突起に2～3本の粘土紐を付するものが点在し、太い斜位、縦位の隆帯が文様を区画し、その間を沈線文で意匠する。胴部の部分片には、渦巻文を沈線文により、太い隆帯間に施す。



第124図 第1土器群平面図

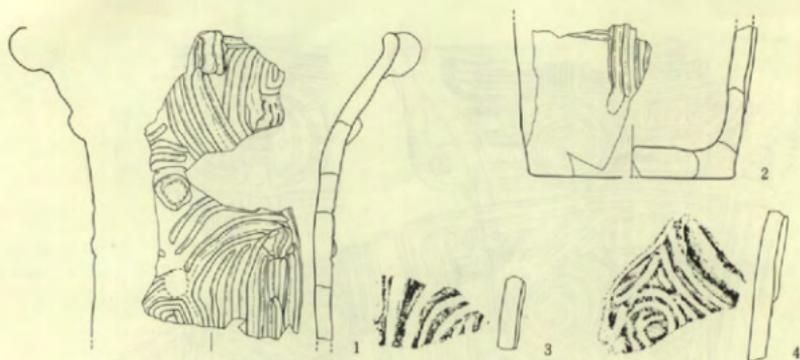


第125図 SD 31出土遺物

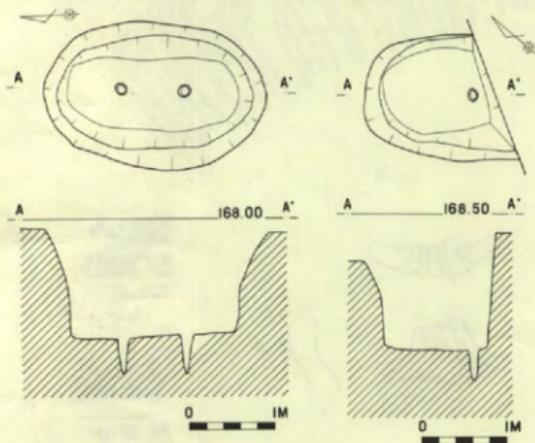
SD 32 (第127図)

所謂、陥穴と称される土壇としては、一番西寄りの平坦部のH区12・13Gに跨り検出された。長軸がN-5'-Eを呈し、上場、下場共に楕円形を呈する。

上場は2.6×1.72m、下場は2×0.85mを測り、壁面は、平坦な底面より中位ほどまでが垂直で、上部に連れて開口する。底面には15cmほどの径を測るピットが二ヶ所に検出され、45cmほどの深さを測る。出土遺物は皆無であった。



第126図 第1土器群出土遺物



第127図 SD 32平面図

第128図 SD 33平面図

SD 33 (第128図)

H区I 13Gの南辺にかかり、半分ほどが上大屋一号線下に入る。SD 32と同様、陥穴と称されるもので、長軸がN-36°-Wを呈し、上場、下場共に楕円形を呈すると考えられ、長軸長は1.8m以上、短軸長1.48mを測る。残存する壁面は、平坦な底面より垂直に立ち上がり、中位より上位に連れて開口する。底面には、12×14cmほどのピットが検出され、深さ40cmほどを測る。

出土遺物は皆無であった。

SD 34 (第129図)

H区G 15Gの南東に検出。所謂、陥穴と称される土坑で、平坦部に掘り込まれており、長軸がN-13°-Eを呈し、SD35とほぼ同じ軸を呈している。上場の一部に歪みがあるものの下場共にほぼ楕円形を呈する。上場は2.73×0.88mを測る。壁面は、平坦な底面より垂直気味に立ち上がり、上部に連れて開口する。底面に於ける施設は確認できない。

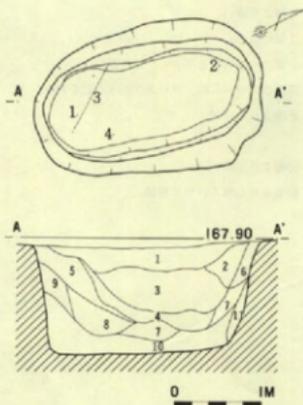
出土遺物は、覆土中のもので総てが諸磯式に比定されるものである。

SD 34出土遺物 (130図1～5)

1. 2. 同一個体片と考えられる口縁部と胴部上半の破片で、口唇部には縦位の刻み目を連続させ、三本一組の浮線文を横位、斜位に貼付し、さらに空間部に曲線文を旋す。浮線文の貼付後、RLの地文を転

がす。

3. 4. 同一個体片と考えられる口縁部片で、波状口縁を呈する深鉢である。波形に沿い、変形爪形文？を伴う平行沈線文を二条並走させ、下方に三角形の区画を平行沈線文で描く。細かい砂粒を多く含み赤褐色を呈している。浮島系の所産であろう？
5. 山形小突起と、刻み目を施す三本一組の浮線文を縦位に口唇部に付し、口唇部に並走して、斜位の刻み目を挟んで爪形文帯を施す口縁部片である。



第129図 SD 34平面図

SD 34土層説明

- | | |
|------------|--------------------------|
| 1 暗褐色土 | |
| 2 におい褐色土 | |
| 3 黒褐色土 | ローム粒、ロームブロック粒を少量含む。 |
| 4 暗褐色土 | ローム粒、カーボン粒を含む。 |
| 5 暗褐色土 | ローム粒、カーボン粒を多く含む。 |
| 6 暗褐色土 | ローム粒、ブロック粒、カーボン粒を斑点状に含む。 |
| 7 におい黄褐色土 | 斑点状にローム粒、ロームブロックを含む。 |
| 8 暗褐色土 | 5層よりも明るい。 |
| 9 におい黄褐色土 | ハードにしまっている。 |
| 10 におい黄褐色土 | ロームブロック粒を多量に含む。 |
| 11 ローム | 崩壊土 |

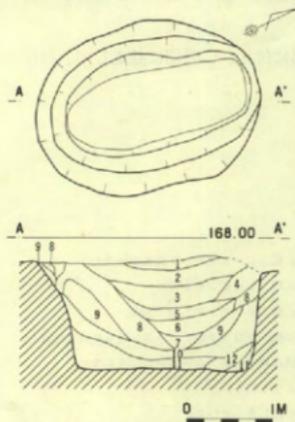


第130図 SD 34出土遺物

SD 35 (第131図 1~5)

H区G17G~H17Gに跨り検出。SD 34と同様に陥穴と称される土塚で、台地の平坦部に掘り込まれ、長軸がN-12°-Eを呈し、上場、下場共に楕円形を呈する。上場は1.32×0.97m、下場は1.05×0.

4mを測る。壁面は北方部を除き、中位上面まで垂直気味となり、上部に連れて開口する。底面に於ける施設は確認できない。出土遺物は皆無であった。



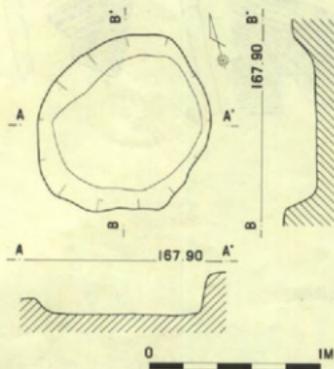
SD 35土層説明

- | | | |
|----|---------|-----------------------|
| 1 | 黒褐色土 | |
| 2 | 暗褐色土 | カーボン粒、ローム粒を含む。 |
| 3 | 黒褐色土 | カーボン粒、ローム粒を含む。 |
| 4 | 暗褐色土 | 2層に似る。 |
| 5 | 暗褐色土 | 4層より暗い。 |
| 6 | 暗褐色土 | 2層に似る。 |
| 7 | 暗褐色土 | 少量のローム粒とブロック粒を含む。 |
| 8 | 暗褐色土 | 斑点状にローム粒、ロームブロック粒を含む。 |
| 9 | 暗褐色土 | 8層よりハード。 |
| 10 | にぶい黄褐色土 | |
| 11 | にぶい黄褐色土 | 10層よりも暗い。 |
| 12 | にぶい黄褐色土 | 10層よりも暗く、やや粘質。 |

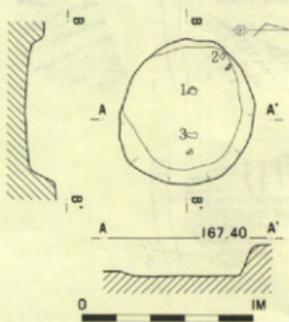
第131図 SD 35平面図

SD 36 (第132図)

H区 I 18Gの南西部に検出されるが、方形状の攪乱により上部が削平されている。長軸長1.1×短軸長0.95mを測る至みのある楕円形で、長軸がN-66°-Eを呈する。残存良好な東壁部で、23cmの壁高を測る。出土遺物は皆無であった。



第132図 SD 36平面図



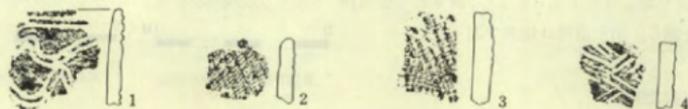
第133図 SD 37平面図

SD 37 (第133図)

H区G18Gの南辺中央部やや東寄りに検出。方形状の擾乱により上部が削平されている。長軸長1.7×短軸長1.55mを測る。円形気味のプランを呈する。壁の残存は、北方方向に連れて良く、20cmほどの壁高が北壁で残る。出土遺物は、覆土中より黒浜式の細片が数点出土したのみである。

SD 37出土遺物 (第134図1~4)

1. ほぼ直立気味に立つ口縁部片で、平行沈線文により口唇部形に沿って一条、下方に相対気味に波状文を描く。
2. 3は胴部の小片である。
4. 平行沈線文をX字状に集合させる。

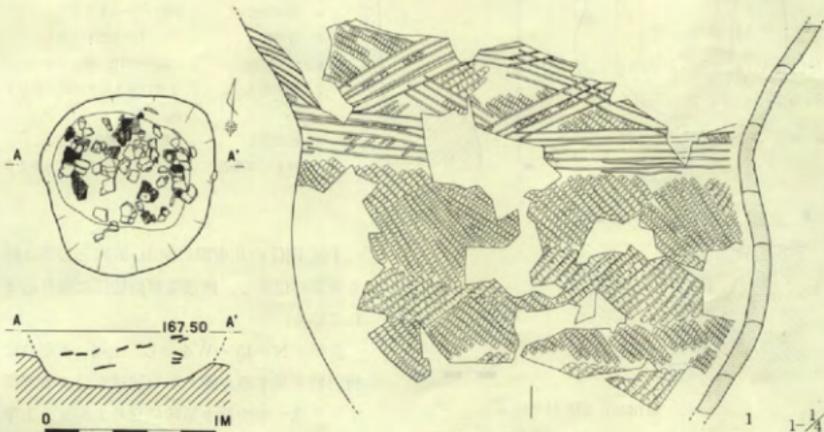


第134図 SD 37出土遺物

SD 38 (第135図)

H区F18Gの中央やや南寄りに検出。上大屋1号線東には、方形状の擾乱が連続するが、丁度その間隙に位置している。1~1.07mほどの円形気味プランを呈し、掘り込みは、浅い皿状である。

出土遺物は、同一個体片が覆土中に細片となり多量に出土している。



第135図 SD 38平面図

第136図 SD 38出土遺物

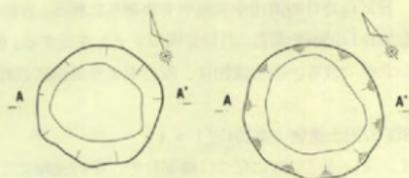
SD 38出土遺物 (第136図)

内湾する胴部より、くの字状に屈曲する頸部を設け、外反して開く口縁部へ移行する個体で、無節Lと単節のRLを交互に回転させて、器面に充填する。

頸部に三条の平行沈線文を並走させて、文様部と胴部無文部を区分し、平行沈線文によりX字状の文様を二条~三条一組で文様部に描く。黒浜式に比定される。

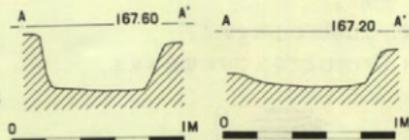
SD 39 (第137図)

I区HOGの南辺中央部やや西寄りに検出。0.7m前後を測る円形プランを呈する。ほぼ平坦な底面より、壁面は開口気味に上部に連れて広がる。出土遺物は皆無であった。



SD 40 (第138図)

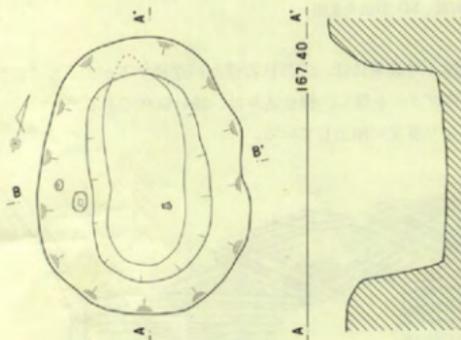
I区G1Gの南西部に検出。方形の攪乱が上部を削平している為、西方の壁部の残存は僅かである。0.8m前後を測る円形プランを呈し、南東部で壁高18cmほどを測る。出土遺物は皆無であった。



第137図 SD 39平面図

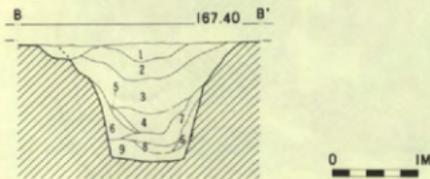
第138図 SD 40平面図

SD 41 (第139図)



SD 41土層説明

- | | | |
|---|---------|------------------------|
| 1 | におい黒褐色土 | |
| 2 | 黒褐色土 | 一番暗く白色粒を含む。 |
| 3 | 暗褐色土 | 斑点状に暗褐色ブロックを含み4層より明るい。 |
| 4 | 黒褐色土 | 少量のローム粒を含む。 |
| 5 | 暗褐色土 | ローム粒・白色粒を含む。 |
| 6 | 暗褐色土 | 少量の暗褐色土混りのローム土 |
| 7 | 暗褐色土 | 9層に似るがカーボン粒がない。 |
| 8 | 暗褐色土 | 7層より明るい。 |
| 9 | 明るい暗褐色土 | ローム粒カーボン粒を多く含む。 |



第139図 SD 41平面図

I区FIGの北東隅に検出。陥穴としては最も東側に位置し、緩やかな傾斜地部に掘り込まれている。

長軸がN-15°-Wを呈し、上場、下場共に楕円形を呈する。緩やかな皿状を呈する底面より垂直へやや開き気味に立ち上がり、上半部

で大きく開口する掘り込みで、下場北側部が挟られている。また、西側の上部開口斜面上に小ピットを設ける。

上場は3.25×2.45m、下場は挟り部を除き2.25×0.9mを測る。底面に於ける施設は確認されない。

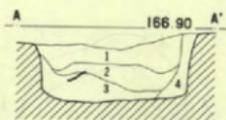
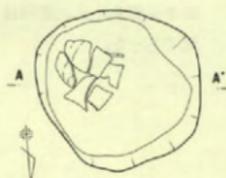
出土遺物は、覆土中より浮線文を伴う土器片が1点出土した。

SD 41 出土遺物 (第140図)

1. 外反して開く胴部上半片で二本一組で横位に並走する浮線文を貼付し、その空間を曲線文で繋ぐ。



第140図 SD 41出土遺物



第141図 SD 42平面図

SD 42出土遺物 (第142図)

胴部下半より外反して開き、直立気味に内湾する胴部へ移行し、頸部でややくの字状に屈曲して外反して開く口縁へ移る。器面は縄文によって充填され、LRと無節のLを交互して施す。

黒浜式に比定される。

SD 43 (第143図)

I区0EGの南東部に検出。長軸がN-18°-Wを呈し、長軸長1.56×短軸長0.97mを測る楕円形プランで、東部の一部が鋭り気味となっている。掘り込みは、底面より摺鉢状に立ち上がり、東方は中位より緩やかなスロープ状とする。最深部で44cmの深さを測る。南西部の底面に長さ25cmほどの礫が密着して出土する。

SD 44 (第144図)

I区E1Gの南辺中央部に検出。長軸がN-3°-Eを呈し、長軸長0.76×短軸長0.62mを測る楕円形プランを呈する。底面は南方部に凹凸が生じているが他は平坦で、ほぼ垂直気味の掘り込みで、15cm前後の深さを測る。黒浜式に比定される細片が2点出土したのみである。

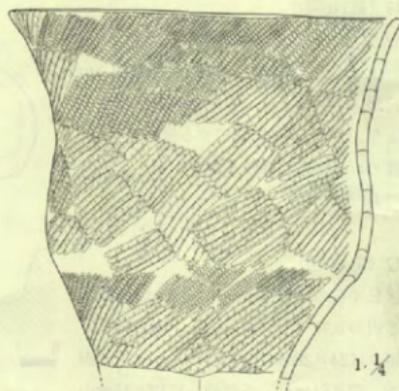
SD 42 (第141図)

I区0EGと1EGに跨がり検出。長軸がN-57°-Eを呈し長軸長1.04m、短軸長0.95mの楕円形プランである。壁面は底面より垂直気味に立ち上がり、上部に連れてやや開口する。西壁部で38cmほどの深さを測る。

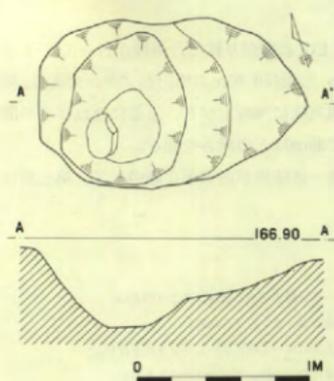
出土遺物は、同一個体片が南東部に集中して、第三層中に出土。

SD 42土層説明

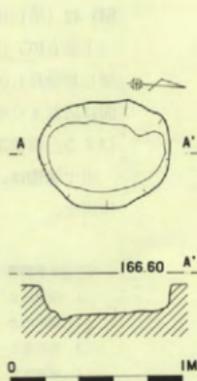
- 1 暗褐色土 カarbon粒子を多く含み、2より明るい。
- 2 暗褐色土 少量のCarbon粒子を含む。
- 3 暗褐色土 塊点状にローム粒、ロームブロックを含む。
- 4 暗褐色土 多量にローム粒、ロームブロックを含む。



第142図 SD 42出土遺物



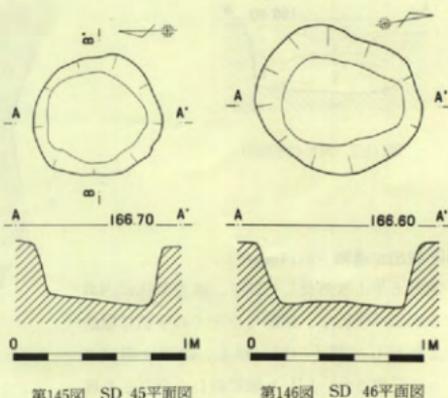
第143図 SD 43平面図



第144図 SD 44平面図

SD 46 (第146図)

I区F2Gの東方に検出。長軸がN-20°-Eを呈し、長軸長0.97×短軸長0.8mの楕円形プランである。僅かに中央が高まる底面より、上方に連れて開口する壁面を呈し、最深部で47cmほどの深さを測る。出土遺物は皆無であった。



第145図 SD 45平面図

第146図 SD 46平面図

SD 47 (第147図)

I区E4Gの北方部に検出。60~65cmほどを測る円形気味プランを呈する。中央部より北壁寄りに24×28cmの楕円形のビット状の掘り込み、深さ61cmと、西壁沿いに12×15cmの円形ビット状掘り込み、深さ35cmを伴う。

出土遺物は、中央部に集中して出土。SD48と接合する同一個体である。

SD 48 (第148図)

I区E4Gの南東方向に検出。同グリット北方にSD47が位置する。85~90cmほどを測る隅丸方形気味の円形を呈する。中央部より周縁部にかけて僅かに上がり気味の底面から壁面は、垂直気味に立ち上がる。最深部で34cmほどの深さを測る。

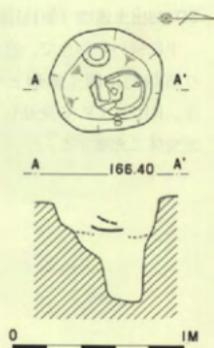
出土遺物は、覆土上層に検出され、同一個体片が、中央部に集中する。

SD 47、48接合個体 (第149図)

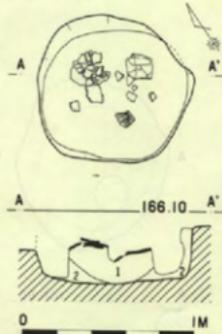
先細りの胴部下半より緩やかに外反して開き、胴部で内湾するラッキョ形を呈する個体である。器面全体に羽状縄文を転がし充填する。黒浜式に比定される。

SD 45 (第145図)

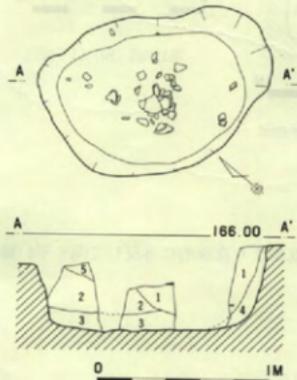
I区F2、3Gに跨がり検出。70~75cm前後の円形気味プランを呈し、南壁より北壁部に連れて上昇する底面より、南壁部は垂直気味、北壁部は開口気味の掘り込みで、最深部で77cmの深さを測る。出土遺物は皆無であった。



第147図 SD 47平面図



第148図 SD 48平面図



第150図 SD 49平面図



第149図 SD 47, 48出土遺物

SD 48土層説明

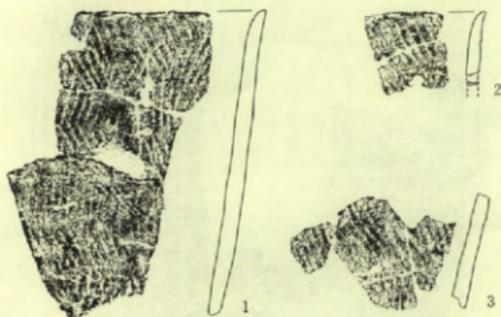
- 1 暗褐色土 白色粒、オレンジ粒、カーボン粒を含む。
- 2 暗褐色土 ローム粒・ブロック粒を多く含み、非常にハードである。

SD 49 (150図)

I区4 DGの中央やや北東寄りに検出。長軸がN-63°-Eを呈し、長軸長1.32×短軸長0.95mを測る楕円形気味プランである。平坦な底面より東壁部は丸味を呈して垂直気味に、他壁は、上部に連れて開口気味に立ち上がる。最深部で57cmほどの深さを測る。覆土中より同一個体片が出土。

SD 49土層説明

- 1 暗褐色土 黒褐色土を多く含む。白色粒・カーボン粒・ローム粒を含みハードである。
- 2 褐色土 白色粒・ローム粒と少量のカーボン粒を含む。
- 3 褐色土 2層よりもローム粒が多くハードになっている。
- 4 黄褐色土 ローム粒・崩壊土
- 5 暗褐色土 カーボン粒を含む。



第151図 SD 49出土遺物

SD 49出土遺物 (第151図)

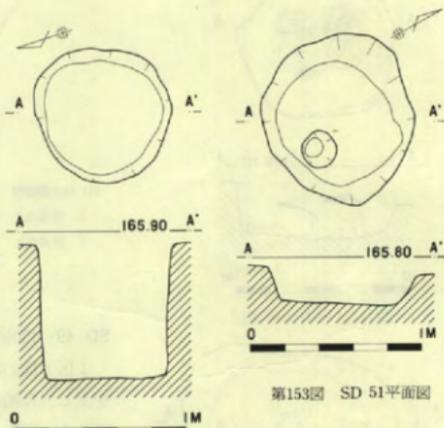
平口縁の深鉢片で、底部より直線的に開く器形となろう。RL と LR を交互して器面全体に充填する。

SD 50 (第152図)

I 区 D 5、E 5 G に跨り検出。75~80cm の径を測る円形プランを呈し、平坦な底面より、垂直気味に立ち上がる壁面で、最深部で 75cm の深さを測る。出土遺物は皆無であった。

SD 51 (153図)

I 区 D 5 G の中央やや西方よりに検出。長軸が N-80°-E を呈し、長軸長 0.93 × 短軸長 0.85m を測る南東部がやや突出する円形気味プランである。底面北方に 20cm ほどの直径を測るビット状の掘り込みを伴い、深さは底面下 18cm である。平坦な底面より開口する壁面で、深さ 15cm ほどを測る。出土遺物は、黒浜式に比定される細片が数点したのみである。



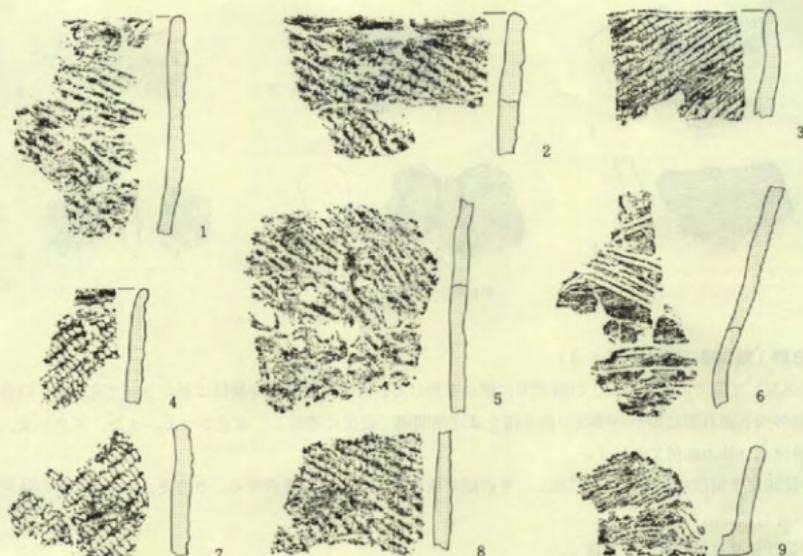
第152図 SD 50平面図

第153図 SD 51平面図

(2) 包含層出土遺物分類 (第154~158図)

B 群 2 類 (第154図)

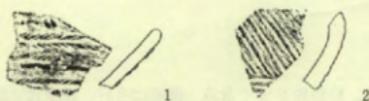
1. 2. 5. 8 は、同一個体片と考えられる口縁部と胴部片で、底部より直線的に外反して開く平口縁の深鉢と考えられる。
3. やや内湾気味を呈する直立した口縁部片である。
4. 7 は同一個体の口縁部と胴部片で、LR の地文を転がす。
6. 半截竹管文により X 字状に平行沈線文を集合させる文様帯部である。
9. 底部から胴部下半の破片で、LR と O 段多条? の地文を転がす。



第154図 B群2類

B群3類D種 (第155図1、2)

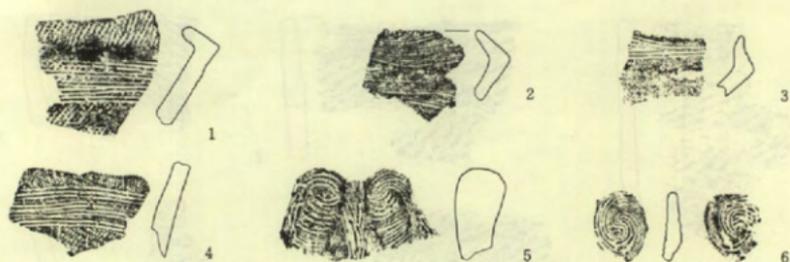
1. 直線的に外反して開く胴部上半片で、薄い浮線文を二本一組で並走させ、矢羽根状刻み目を施す。
2. 内湾して口縁部へ移行する胴部上半片で、薄い浮線文を斜位で密に施し、細かく刻み目を施す。



第155図 B群3類D種

B群3類C種 (第156図1～6)

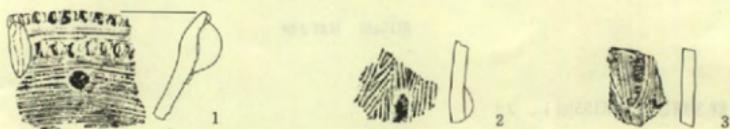
- 1～3は、直線的に外反する胴部上半より、くの字状に強く屈曲する口縁部で、3は直立気味に屈曲し、口唇部を鋭り気味とする。1、3は縄文を施した後、屈曲部下に細沈線文を横位に廻らし、3は口縁部帯に、2は口縁部帯と胴部上半に細沈線文を施す。
4. RLの地文を施した後、横位に細沈線文を廻らす胴部片である。
 5. 鳥帽子状を呈する波頂部片で、細沈線文により両側面に渦巻状の文様を描く。
 6. 楕円形気味の突起片で、細沈線文により両側面に渦巻文を描く。



第156図 B群3類C種

B群3類G種 (第157図1~3)

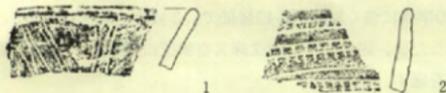
1. 外反して開く口縁部片で、口唇部下に頸れを設ける。器面に沈線文を横位に並走させて充填し、口唇部外面と頸れ部に短かい棒状の粘土紐をほぼ等間隔で縦位に連続し、並走させる。また、ボタン文、カマボコ状の貼付文を付す。
2. 沈線文を縦位に間隔を置いて施し、その間に綾杉状に沈線文を集合する。その後、カマボコ状の貼付文を付す。
3. 細沈線文により意匠文を描く。



第157図 B群3類G種

B群4類 (第158図1、2)

1. 外反して開く口縁部片で、沈線文により意匠文を描く。粗砂粒を多く含み、焼成は良好。興津式に比定されるものであろうか？
2. 直立気味に立つ口縁部片で、並走する沈線文上に縦長の刺突を連続させる。長石、石英等の粗砂粒を多く含む。焼成は良好。大木系の所産であろうか？



第158図 B群4類

4. J・K区

(1) 検出した遺構と遺物 (第159～190図)

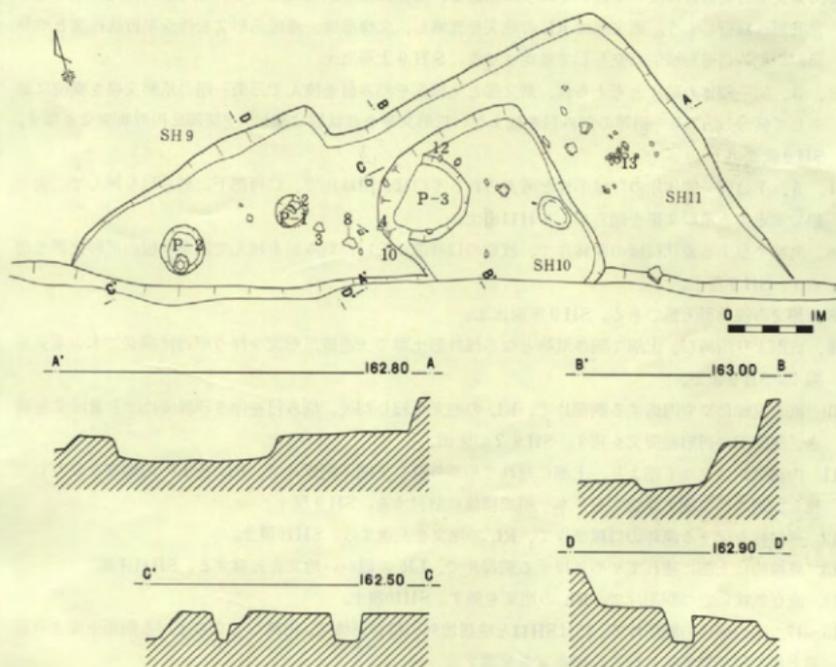
J・K区は、台地部と低地部に分かれ、低地部では前期の住居址と土壇群、早期の出土遺物が目立ち、路線北壁部には平安期の住居址を検出した。台地部に於いては前期～中期の出土遺物と土壇2基を検出した。

SH 9～11 (第160図)

I区MI、2Gに検出。3軒の住居址が重複するが、南方部は田甫の区画整備により破壊されている為に、その全容は明確を欠く。

SH 9は、重複する3軒の住居址の西方に位置し、北辺と東辺の一部が残存する。北辺は北西コーナーらしき曲がりが見られる為、一辺が3.4m以上の方形気味プランを呈すると考えられる。

床面は北方部より南方部に向けて緩やかに傾斜し、北壁面は開口気味に立ち上がる。柱穴は、二ヶ所検出され、北辺にほぼ平行し、1.4m前後の柱間で、35m前後の深さを測る。周溝、炉址等は検出されない。出土遺物は、東辺部方面の床面に集中し、爪形文土器、浅鉢等が出土。覆土上層で結節浮線文土器



第159図 SH 9～11平面図

等が出土している。

SH10は、重複する3軒の住居地の中央部に位置し、南辺と西辺の一部が破壊されているが、長軸がN-31°-Wを呈し、長軸長約2.6m、短軸長2mを測る方形プランである。

床面はほぼ平坦であるが、SH9同様に南方部が緩やかに傾斜する。壁面は開口気味に立ち上がり、北壁部で38cmほどの壁高が残存している。北西隅には、土壇状掘り込みが設けられ、1m程の直径を測る円形プランと考えられる。深さは床面下10cmを測る。柱穴、周溝状の掘り込みは検出できない。

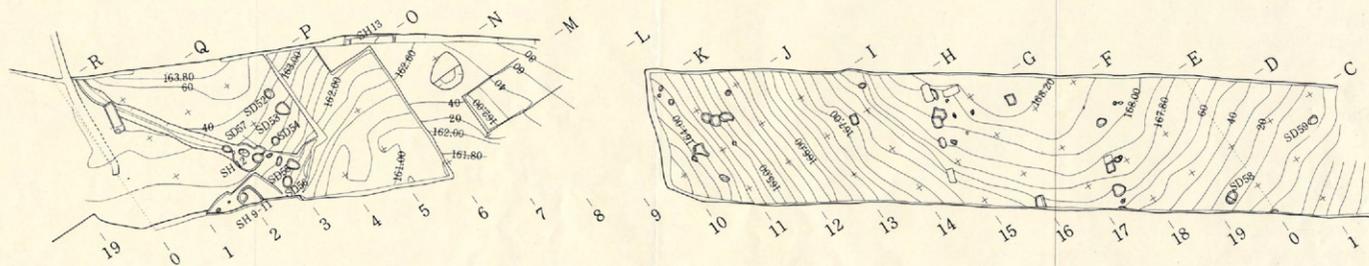
炉址と考えられる施設の存在は明確にできなかったが、中央部床面に僅かに焼土粒を確認したに過ぎない。出土遺物は、細片が覆土中より数点検出されただけである。

SH11は、東方に検出され、北辺と東辺の一部が残存する。北辺は3.35m、東辺は3.9mを測り、方形のプランを呈している。残存する床面はほぼ平坦で、床面より直線的に立ち上がる壁面を呈し、最深部で53cmの壁高を測る。柱穴、周溝、炉址等の掘り込みは検出できなかった。

出土遺物は、東壁寄りの床面に同一個体片が集中し、覆土中に摺糸文を施す深鉢片と諸磯C式に比定される個体が出土。

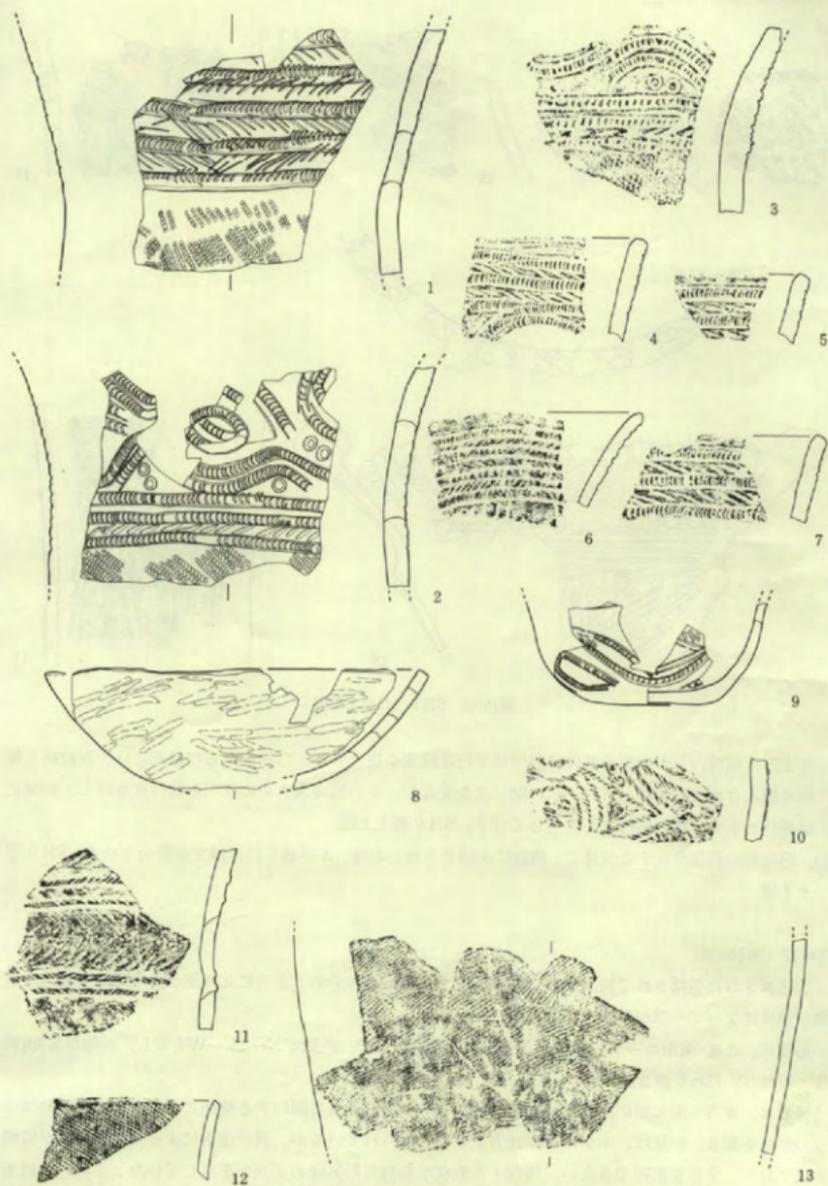
SH9～11出土遺物（第161、162図1～19）

1. 素文部と文様部の境いで軽いくの字に屈曲し、文様部は直線的に外反し、素文部は内湾気味となって底部へ移行しよう。素文部はRLの地文を充填し、文様部は、連続爪形文を伴う平行沈線文とやや長目の刻み目帯を横位に交互して並走させる。SH9上層出土。
2. 3. 同一個体の破片と考えられ、素文部と文様部を刻み目を挟んで三条一組の爪形文帯を横位に廻らして区分し、二条一組等の刻み目を挟まない爪形文帯を波状等に施し、空間部に円形刺突文を施す。SH9床面出土。
4. 5. 7は同一個体片の口縁部片と考えられる平口縁の深鉢片で、口唇部下に刻み目を挟んで二条一組で並走する爪形文帯を廻らす。SH11出土。
6. 丸味を呈する波状口縁の深鉢片で、波形の口唇部に沿い、刻み目を挟んで四条一組の爪形文帯を廻らす。SH9覆土。
8. 無文の浅鉢形土器である。SH9床面出土。
9. 底部より内湾し、上部で開き気味となる浅鉢形土器で、連続爪形文を伴う平行沈線文で木の葉文を描く。SH9覆土。
10. 直立気味にやや内湾する胴部片で、RLの地文を施した後、刻み目を伴う浮線文により意匠文を描き、空間部に円形刺突文を施す。SH9?の床面。
11. 内湾気味に立つ下部より、上部に連れてやや外反して開く胴部片で、RLとLRの地文を交互して施し、刻み目を施す浮線文を二本一組で横位に貼付する。SH9覆土。
12. 平口縁を呈する深鉢の口縁部片で、RLの地文を充填する。SH10覆土。
13. 直線的に上部に連れてやや外反する胴部片で、LRの細かい地文を充填する。SH11床面。
14. 直立気味に立つ胴部片で、RLの地文を施す。SH10覆土。
- 15～17. 同一個体の胴部片で、15はSH11と住居地外の接合個体で、内湾して立ち上がる胴部下半より胴部上半で円筒形気味となる。摺糸文を充填する。
18. 直線的に外反する胴部より、くの字状頸れを設け、外反して大きく開く口縁部へ移行する。頸部よ

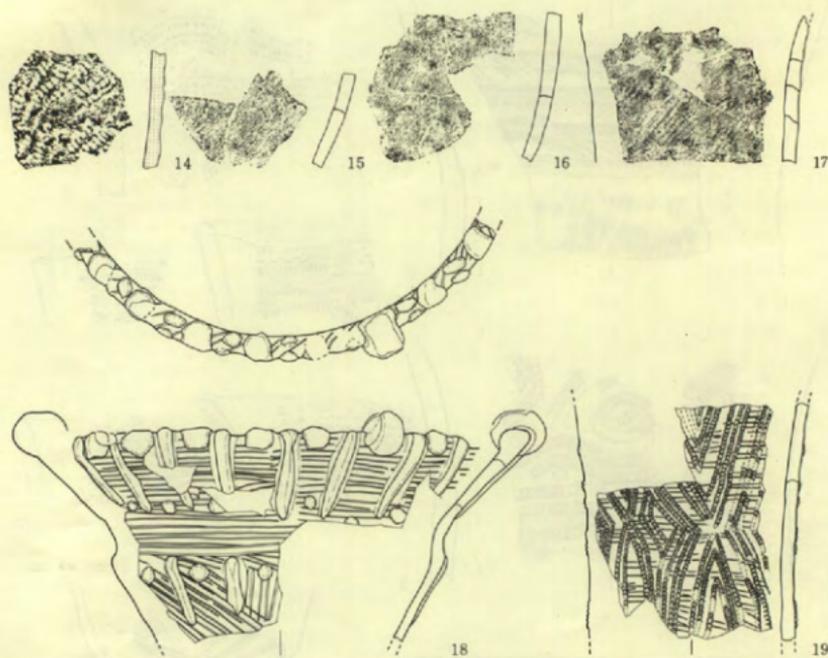


第160图 J·K区全体图

III 検出した遺構と遺物



第161図 SH 9～11出土遺物(1)



第162図 SH 9～11出土遺物②

り上方は横位、下方と口唇部には斜位に平行沈線文を集合させ、口唇部から口縁部には、豆粒状と棒状を組み合わせ、舌状とボタン状の貼付文を交互し、その間に大きめの楕円形貼付文を付し、胴部には棒状とボタン状の貼付文を交互して付す。SH 9 覆土上層。

19. 円筒形の胴部を呈する深鉢で、横位に沈線文を施した後、X字状に結浮線文を集合させる。SH 9 覆土上層。

SH12 (第163図)

J区N2Gに包括されて検出した。南東部にはSD57が切り合い、さらに北西部から南東部に走向する溝状遺構によって一部が破壊されている。

形状は、北東・南東コーナー部がやや突出する隅丸方形で、長軸がN-15°-Wを呈し、長軸長3.3m前後×短軸長2.75mを測る。

床面は、東方～南方部に向けて緩やかに傾斜し、上方に連れて開口する壁面に移る。東方部で43cmほどの壁高を測る。炉址は、中央部やや北方よりに設けられているが、溝状遺構によって半分以上が破壊されており、全容を把握できない。残存する形状から楕円形気味のプランを呈していたと思われ、焼土粒が充滿していた。最深部で8cmほどの深さを測る皿状の掘り込みである。

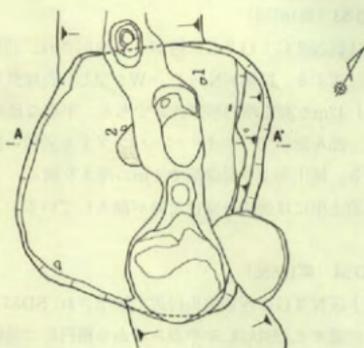
柱穴・周溝状の掘り込みは確認できなかった。出土遺物も諸磯式に比定される小片が、数点検出されたに過ぎない。

SH 12出土遺物 (第164図)

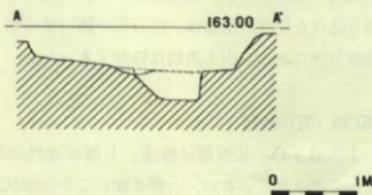
1. 胴部上半より外反して、口縁部で強く内湾する口縁部へ移行する。口縁部は矢羽根状、下方に横位、斜位に沈線文を集合させ、つの子状に貼付文を付し、その間に刺突文を施す楕円形の貼付文を付す。
2. 直立気味に内湾する胴部片で RL の地文を施す。



第164図 SH12出土遺物

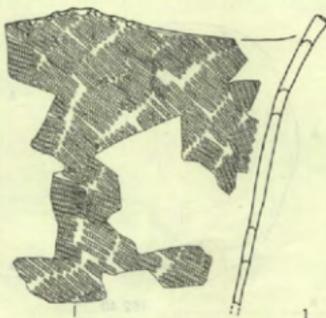


第163図 SH12平面図

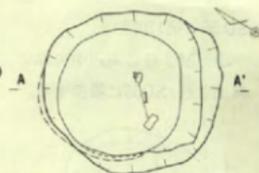


SD 52 (第165図)

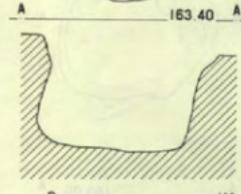
J区O3Gの中央やや東寄りに検出され、SD53の北方に位置する。形状は、やや歪みのある円形気味を呈し、長軸長1.50×短軸長0.95mを測る。ほぼ平坦な底面より北西壁部は、丸味を帯びて立ち上がり、やや袋状を呈し、中位上面から開口し、南壁部は、直立して上部で開口する壁面で、確認面より最深部で60cmほどの深さを測る。覆土中より同一個体片が出土。



第166図 SD52出土遺物



第165図 SD52平面図



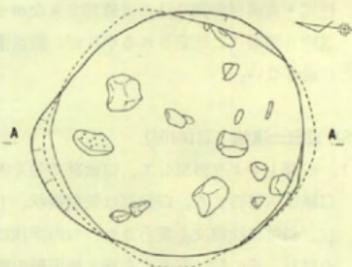
SD 52出土遺物 (第166図)

直線的に上方に連れてやや外反して開く胴部より、軽く屈曲してさらに外反して開く口縁部へ移行する緩やかな波状を呈する深鉢片である。波頂の口唇部には、波頂部に幅広の刻を目を中心として左右に3ヶ所の刻み目を施す。器面には RL の地文を充填する。

SD 53 (第167図)

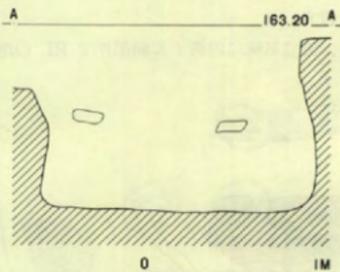
J区N3GとO3Gに跨って検出され、北方にSD52が位置する。長軸がN-7°-Wを呈し、長軸長1.57×短軸長1.42mを測る楕円形プランである。平坦な底面より東壁の一部を除いてややオーバーハングする袋状の掘り込みである。検出面より最深部で1mの深さを測る。

覆土中には焼成を受けた礫が混入している。



SD54 (第168図)

J区N3Gの西辺中央付近で検出され、SD53と55の間に位置する。形状は、やや歪みのある楕円形で長軸長0.95×短軸長0.85mを測る。南東壁部に15×20cmほどのピット状掘り込みを伴う。壁面は、南方部が開口するが、北方部は垂直気味である。出土遺物は皆無であった。



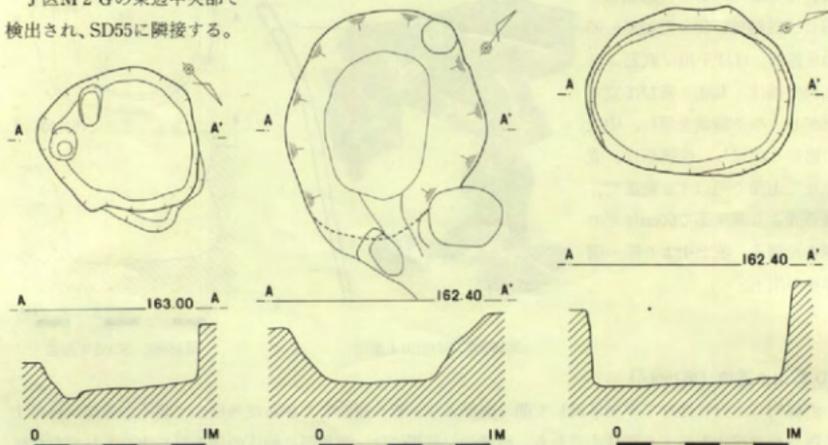
SD 55 (第169図)

J区M3Gの北西部に検出。上部が近代の溝状遺構によって壊されているが、一部を除いてその形状を留める。長軸がN-38°-Wで、長軸長1.3×短軸長1.18mを測る楕円形を呈する。残存する最深部で30cm前後の深さを測る。出土遺物は皆無であった。

第167図 SD53平面図

SD 56 (第170図)

J区M2Gの東辺中央部で検出され、SD55に隣接する。



第168図 SD54平面図

第169図 SD55平面図

第170図 SD56平面図

長軸はN-21°-Eを呈し、長軸長1.22×短軸長0.96mを測る楕円形プランである。掘り込みは、垂直に近く、北壁部で55cmほどを測り、底面は平坦である。出土遺物は皆無であった。

SD 57 (第171図)

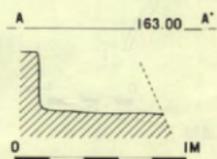
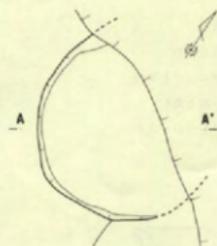
SH12の南東隅に検出され、半分ほど近代の溝状遺構によって壊されている。残存部より円形気味のプランを呈すると考えられ、1.10m前後の直径を測ろう。出土遺物は皆無であった。

SD 58 (第172図)

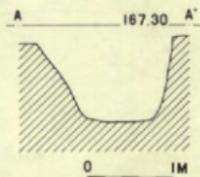
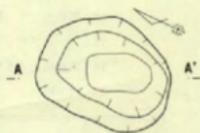
J区A19Gに検出され、長軸がN-3°-Wを呈し、長軸長1.57×短軸長1.23mで東方がやや張り出す楕円形プランである。掘り込みは、北方壁が垂直気味で、南方壁では緩慢となる。出土遺物は皆無であった。

SD 59 (第173図)

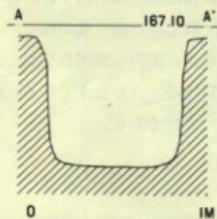
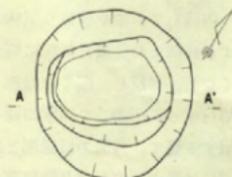
J区の舌状台地を横断する調査区で最東に位置し、K区B1Gで検出。直径0.93~1mほどの円形を呈し、隅丸方形の底面より垂直気味に立ち上がり、上部で南東が大きく開口する壁面を呈し、最深部で75cmの深さを測る。出土遺物は皆無であった。



第171図 SD57平面図



第172図 SD58平面図



第173図 SD59平面図

歴史時代の遺構と遺物 (第174、175図)

J・K区に於いて、歴史時代の竪穴住居一軒が検出されたが、調査区内では全容を明確にできなかった。

SH 13 (第174図)

J区O5、6G、N6Gに跨り、路線北側に僅かにかかり検出。確認されたのは、東辺、西辺と釜

土の一部で、南辺は重機により掘り下げてしまった為、その確認はできなかった。東辺と西辺は、ほぼ平行し、E-34°-Sの軸を呈し、3.35mほどを測る。

床面は、ほぼ平坦で、周溝、柱穴の掘り込みは検出できなかった。掘り込みは、ローム上面の暗褐色土より確認でき、40cm前後の壁高を測る。

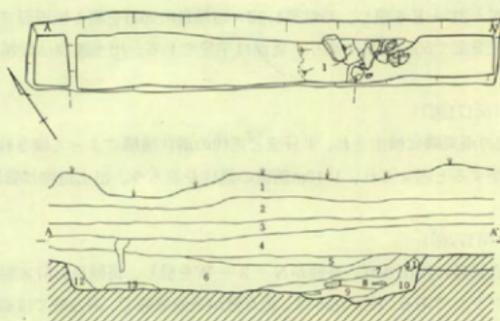
釜土は、東辺の南東寄りに位置すると考えられ、舌状形に70cmほど張り出していよう。

出土遺物は、釜土焚き口部で、所謂、コの字口縁を呈する甕片の出土のみであった。

SH13出土遺物 (第174図)

内湾して、やや肩張り気味とする肩部より、直立気味に短かく立ち、外反して開く口縁部へ移行する。所謂、コの字口縁を呈する甕で、外面の口縁部と頸部には指頭圧痕が残り、肩部には、横位の篋削り痕が残る。

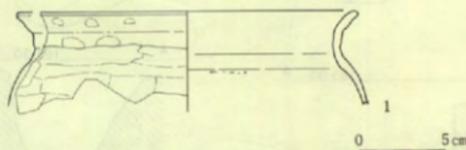
色調は褐色～暗褐色を呈し、砂粒を多く含む胎土である。焼成は良好である。



第174図 SH13平面図

SH13土層説明

- 1 耕作土
- 2 褐色砂質土 A軽石を含む
- 3 褐色土 2層より明るく密
- 4 褐色土 B軽石を含む
- 5 B軽石
- 6 黒褐色土 カーボン粒子を含む
- 7 暗褐色土 焼土粒・ローム粒を含む
- 8 暗褐色土 多粒の焼土粒・ブロックを含む
- 9 暗褐色土 焼土粒・カーボン粒を含む
- 10 褐色土 焼土粒・ブロックを含みソフト
- 11 ロームブロック
- 12 黒褐色土 6層より明るい
- 13 焼土粒



第175図 SH13出土遺物

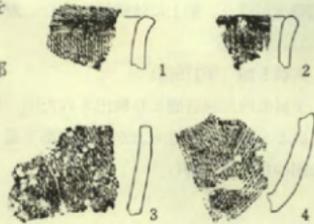
(2) 包含層出土遺物分類 (第176～190図)

舌状台地部と低地部に分かれるJ・K区では、主として低地部より早期の所産の破片が多く、台地部では、前期後半～中期初期の破片が検出された。

A群1類 (第176図)

撫糸文系土器は、J区低地部の包含層より検出された。

1. 直立する胴部上半より口縁部を僅かに外反させ、口唇部を円頭形に丸める。口唇部には斜位のRの燃糸を施す。
2. 直立気味に立つ口縁部を肥大させて円頭形とする。口唇部直下より縦位のRの燃糸を施す。
3. 胴部下半片で、Rの燃糸を斜位、縦位に充填する。
4. 胴部片で、3と同一個体かも知れない。Rの燃糸を斜位、縦位に施す。

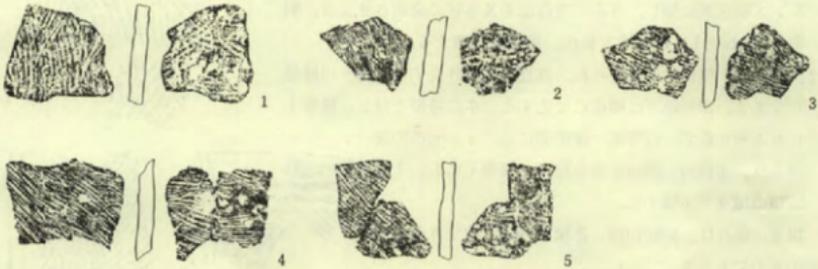


第176図 A群1類

A群3類 (第177図)

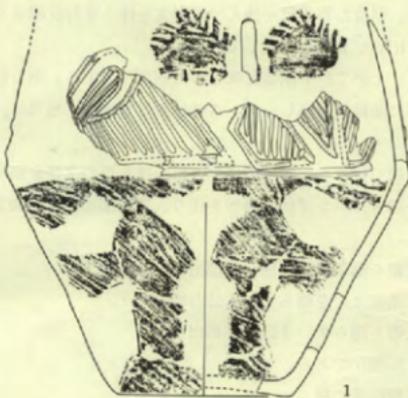
条痕文土器も1類と同様に、L区低地部包含層より検出された。

1~5は、内側面に縦位、斜位に条痕文を施す破片で、胎土中に繊維を含む。



第177図 A群3類

A群3類 (第178図)



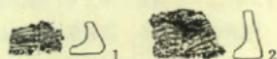
第178図 A群3類

J区の低地部包含層出土の接合個体である。やや上げ底状の底部より、直線的に外反して開き、胴部でくの字状に屈曲し、口縁部は直立気味に立つ波状口縁となろうか？

屈曲部より、上部が文様部とし、内面と底部、外面下部に条痕文を施す。文様部は、沈線文により、つの字状、台形状等を区画し、沈線文上に隆起線文を貼付する。無文部を挟んで区画内に集合沈線を充填する。縦位に並走して垂下する隆起線文上には、矢羽根状に刻み目を付す。

同一個体片と考えられる口縁部片は、波状を呈し、口唇部に刻み目を施す。口唇部下には、僅かに横位とそれより垂下する二本の隆

起線文が残り、胎土には繊維を含む。野島式に比定されよう。



第179図 A群5類

A群5類 (第179図)

J区低地部包含層より検出された同一個体と考えられる破片で、平底より内傾して立ち上がり、胴部下端には、貝殻腹縁圧痕文を施す。色調は黄褐色を呈し、胎土中には細砂粒を多く含む。

B群1類 (第180図1~3)

1. 直立気味に立つ口縁部片で、波状を呈する。波形に沿って口唇部下2.5cmほどに刻み目を施す隆帯を付す。口唇部と隆帯間には、原体L $\left\{ \begin{array}{l} \text{---} \\ \text{---} \end{array} \right\}$ と原体R $\left\{ \begin{array}{l} \text{---} \\ \text{---} \end{array} \right\}$ の燃糸を一組として並列させ、側面圧痕をレンズ状区画に施し、さらに空白部をX字状に交差させよう。胴部は、RL とLR の地文を斜位、縦位に充填する。
- 2, 3は同一個体片と考えられ、直立気味に外反する胴部~口縁部片である。口唇部下に横位に並走する二本の隆帯を付し、隆帯上に刻み目を施す。口唇部と隆帯間には、1と同様の原体より、曲線的に側面圧痕を施す。隆帯下にも、1と同様の地文を充填する。

以上の破片は、前期初頭、花積下層式に比定される所産のものであろう。



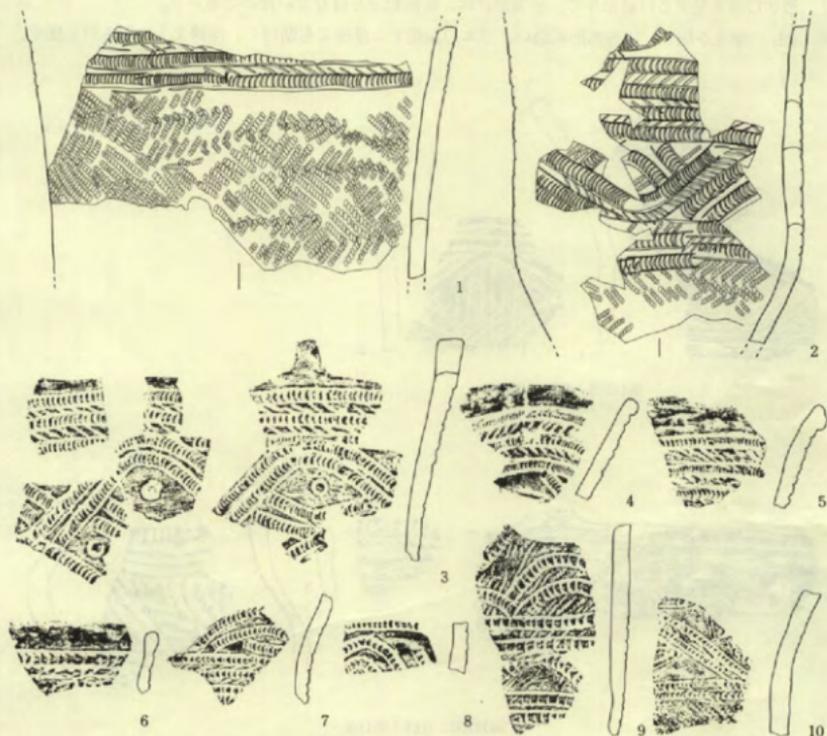
第180図 B群1類

B群3類B種 (第181図)

1. J区台地部出土の胴部片で、素文部と文様部を、斜位の刻み目を挟んで爪形文を伴う平行沈線文を横位に廻らす爪形文帯で区画している。地文は、RL と LR を交互して施す。
2. 内湾する胴部下半より、直立気味に立ち上がり、上部でやや開き気味とする胴部片である。刻み目を挟む爪形文帯が2ヶ所に設けられ、その空間部に曲線文を施し、レンズ状区画等を描く。地文は、RL と LR を交互する。I区台地部の出土。
3. 外反気味にやや開く口縁部片で、口唇部に小突起を付す。口唇部下に刻み目を挟む爪形文帯を横位に廻らし、下方に波状的に二条一組の爪形文帯を描き、レンズ状区画等を作り、空白部に円形刺突文を施す。J区台地部の出土。
4. 波状を呈する口縁部片で、波形に沿って爪形文帯を廻らす。J区台地部出土。
5. 緩やかな波状を呈する口縁部片で、口唇部下に爪形文帯を廻らす。J区台地部出土。
6. 平口縁を呈する口縁部片で、口唇部下に爪形文帯を廻らす。J区台地部出土。
7. 爪形文帯を横位に廻らし、上方に曲線文を描く胴部片である。
8. 胴部上半の破片で、爪形文を伴う平行沈線文を横位等に描く。
9. 直立気味に立つ胴部片で、二条一組で横位に並走する爪形文帯が二ヶ所に設けられ、その間に弧文

を描く。地文は、無節のLであろうか？

10. 直立する胴部より、上方に連れて外反する胴部片で、横位に廻る爪形文帯で素文部と文様部を区画し、二条一組の爪形文帯を斜位に描き、空白部の区画内に木の葉文状の文様を描くのか？素文部は、RLの地文を充填する。



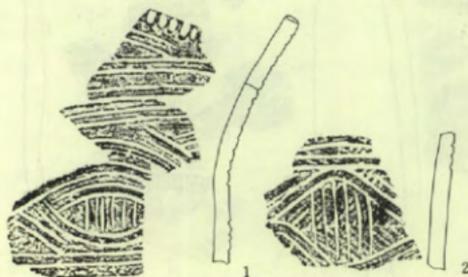
第181図 B群3類B種

B群3類C種 (第182図)

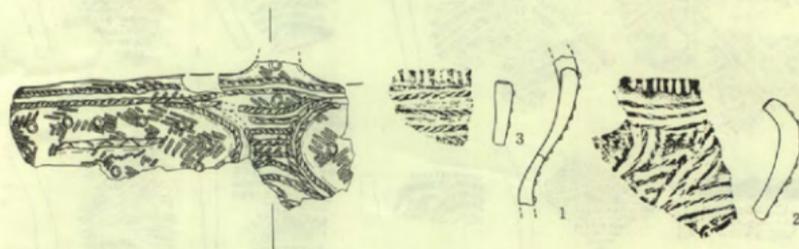
1. 直立気味の胴部より外反して開く口縁部へ移行する、波状を呈する深鉢片である。口唇部には、刻み目を付す。平行沈線文を、斜位、曲線で描き、レンズ状区画等を作り出し、区画内には、縦位に走らせる。地文は、RLを施す。
2. 平行沈線文により、菱形文等の区画を作り、区画内を縦位に描く。地文はRLである。
1、2は、J区低地部包含層の出土である。

B群3類D種 (第183図)

1. 直立気味の胴部よりキャリバー気味に内湾する口縁部には、山形突起を付すのであろうか。文様は、二本一組で並走する浮線文により、突起下に離れX字を施し、空間を梯子状に連結し、楕円形文区画を作る。区画内には、短い横位の浮線文を貼付する。円形刺突文は、突起下と楕円形区画内に施す。浮線文上には、刻み目を付す。RL と LR で施す。
2. 波状口縁を呈する口縁部片で、波頂部には、獣面把手を付していたのであろう。
3. RL の地文を施し、口縁部形に沿い、三本の並走する浮線文を貼付し、浮線文上に刻み目を施す。



第182図 B群3類C種

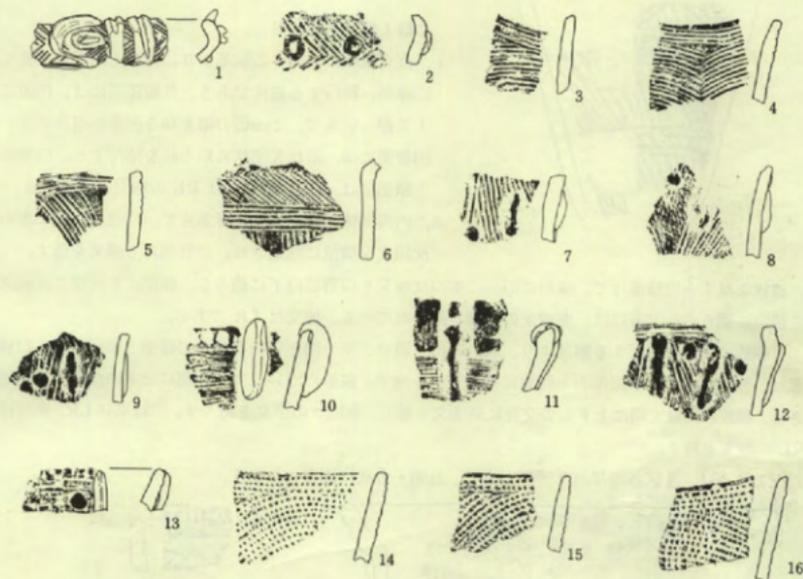


第183図 B群3類D種

B群3類G種 (第184図)

1. キャリバー状に内湾する口縁部片で、矢羽根状に沈線文を集合させ、貝殻文、ボタン文、カマボコ状文の貼付文を付す。ボタン文には刺突、カマボコ状文には沈線文を施す。
2. 矢羽根状に沈線文を集合させ、ボタン文を貼付し、刺突を施す。
3. 4は、波状を呈する口縁部片で、肋骨文状に平行沈線文を集合させる。
5. 沈線文を横位、斜位に施す胴部片である。
6. 2の胴部片であろうか？頸部より斜位、横位、縦位に沈線文を集合させる。
7. 8は、同一個体の胴部片で、沈線文を斜位、縦位に集合させ、ボタン文、棒状文を貼付する。地文は、RLである。

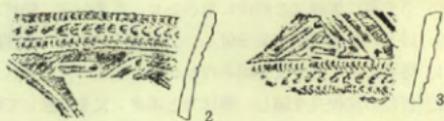
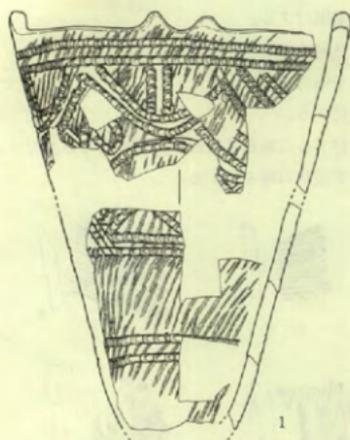
9. やや雑に沈線文を斜位に集合させ、ボタン文、棒状文を貼付する。
10. 縦長の貝殻状貼付文を付し、口唇直下に刺突文を連続させる。
11. 棒状文とボタン文を組み合わせ、左右にカマボコ状文を貼付する。
12. 斜位の沈線文を施し、棒状文とボタン文を交互して貼付する。
13. 横位の沈線文を施し、棒状文とボタン文を交互して貼付する口縁部片で口唇部端に刻み目を付す。
- 14~16. 結節浮線文を横位、曲線文で集合させる口縁部片で波状口縁を呈する。



第184図 B群3類G種

B群4類 (第185図)

1. 小き目の底部より直線的に外反する深鉢で、口唇部には、小突起二個一組で二ヶ所に付すであろう。二条一組で並走する平行沈線文間に爪形文を連続させる爪形文帯を、口唇部下、胴部中位、下位の三ヶ所に設ける。口唇部中位間に、爪形文帯により相対する曲線文等を描き、半円、菱形等の区画を作り、区画内に爪形文帯を垂下等させる。地文は、撫糸文を施す。
2. 3は、同一個体片で連続爪形文を挟んで並走する平行沈線文内に、変形爪形文を施す爪形文帯間に平行沈線文を斜位に描き、横位のは、短かく、そして両端を半截竹管文によってとじる。地文は、無節のL?を施し、胎土中には、細砂粒を含む。
- 1~3は、浮島系に比定される所産のものであろう。

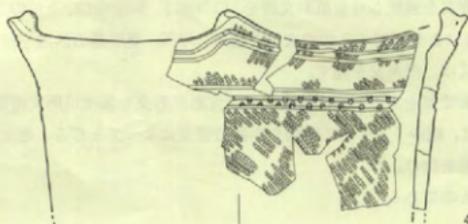
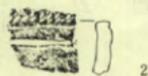
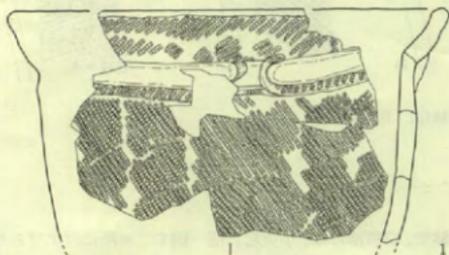


第185図 B群4類

C群1類 (第186図)

1. 直立気味に内湾する胴部より、短かく内湾して開く口縁部へ移行する破片である。外面頸部には、指頭による押し引きで、2 cm弱の幅を測る凹帯を廻らせる。凹帯間には、離れX字状に粘土紐を貼付する。口縁部と頸部には、LR、胴部には RL の地文を充填する。
2. 内湾気味に直立する口縁部片で、口唇部下に二本の沈線文を横位に並走させ、口唇部にも縄文を施す。
3. 波状を呈する口縁部片で、波形に沿い二本の沈線文を口唇部直下に廻らし、頸部にも同様に沈線文を横位に廻らす。下方には、曲線文の一部が描かれている。地文は LR である。
4. 直線的に僅かに外反する胴部より、軽い頸部を設け、やや開き気味とする口縁部へ移行する。口縁部は、波状を呈し、波頂部の一側面に指頭圧痕を施す。波形に沿い二本、頸部に三本の沈線文を並走させ、頸部の沈線文間に上下して交互に刺突文を施し、連続コの字文を廻らす。口縁部は LR、胴部は RL の地文を施す。

以上の4点は、J区谷地部包含層の出土で、五領ヶ台式に比定されよう。

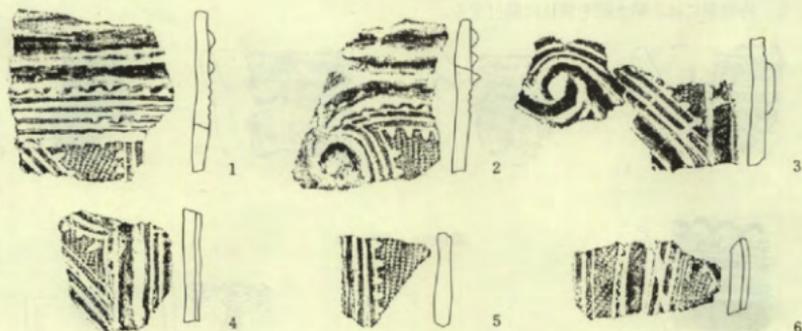


第186図 C群1類

C群2類 (第187図)

1～6は、同一個体の胴部片と考えられ、太い隆帯を二本横位に廻らし、口縁部と胴部文様帯を区画して区画内には渦巻状文等に隆帯を施し、空間部には、隆帯沿いに沈線文を施す。区画帯の隆帯下の沈線文には、二本の沈線文を挟んで上下に連続コの字文を施し、沈線文区画内には、半載竹管による刺突文を連続させる箇所もある。地文はLRである。

1～6は、J区台地部包含層出土の破片で、中期、勝坂系の所産であろう。



第187図 C群2類

C群3類 (第188図)

J区低地部包含層出土である。

1. 直立して立つ胴部より、口縁部を僅かに外反させる平口縁の小型深鉢片で、橋状把手を付す。文様は、製作痕を残す無文部を挟んで、口縁部には、半載竹管文による連続刺突文を伴う沈線文区画内に鋸歯状文を施す。胴部には、連続刺突文により文様を描く。
2. 波状口縁を呈し、波頂部をU字形気味に窪ませよう。口唇部には、半載竹管による押引文を施す。波形に沿い、弱い高まりの隆帯を設け、口唇部と隆帯間に押引文による連弧文を伴う区画状文を描き、隆帯下には、沈線文により波状文を描く。
3. 口縁部の小片で、外面口唇部端は鉤状とし、口唇部と口縁部に押引文を施す。
4. 波状口縁を呈し、波頂部を平坦とする。口唇波頂部には、刻み目を付す。口唇部下には、波形に沿い並走する二条の押引文が施される。

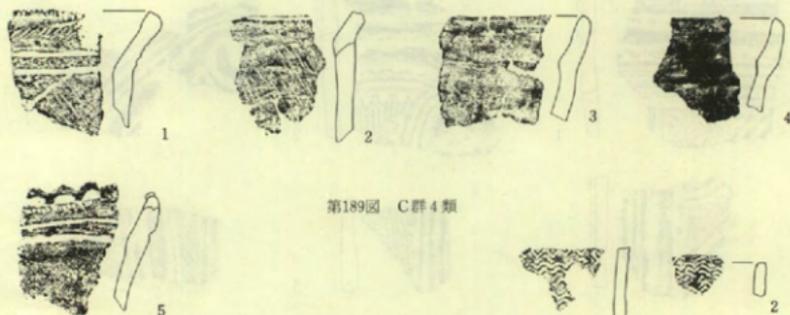


第188図 C群3類

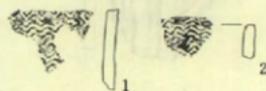
C群4類 (第189図1~5)

1~5はJ区低地部包含層出土の破片である。

- 1, 2は、同一個体片であろう。直立気味の胴部より、くの字に折れて短かく外反する口縁部へ移行する。頸部には、並走する沈線文を横位に廻らし、口唇部には、刻み目を付す。地文は捺糸文か？
- 3, 4は、同一個体片かも知れない。やや内湾気味に立つ胴部より、僅かに頸れを施し、内面に陵を設ける。口縁部は、直立気味に内湾し、鋭り気味の口唇部とする無文土器である。
- 5, 波状口縁を呈する口縁部片で、口唇部下に二本の沈線文を並走させ、口唇部には、連続刺突文を施し、内面端には、粘土紐を波状に貼付する。



第189図 C群4類



第190図 A群1類

A群1類土器 (第190図)

同一個体片の口縁部と胴部片で山形押型文を口唇部、外面口唇部下に横位、下方を縦位に施す。

5. 包含層出土石器分類 (第191~204図)

磨石 (第191~197図1~87)

1~3は特殊磨石(穀擦石)と称されるもので、1は縦長隅丸方形の平面形で断面楕円形を呈し、両側面に瓜形平坦研磨面と平坦狭長研磨面を残すと共に表裏面の全体に近い部分を研磨面としている。2は片側面、3は両側面に平坦狭長研磨面がみられる。いずれもJ区小谷地の出土である。

4~87は、ものを敲いたり、砕いたり、磨いたり潰したりする機能が複数含まれるものが多く、敲石、磨石、凹石と称されているものであり、この為、総称して磨石とし、下記の分類表に基づき分類する。

- | | | |
|--------------|--------------|-------------|
| 1. 平面形により | A 磨面により | C 敲打痕の有無により |
| I 円形かそれに近い形状 | a 表裏面使用 | |
| II 楕円形 | b 側面 | |
| III 石鉢形 | c 全面 | |
| IV 棒状形 | d 片面 | |
| V 分銅形気味 | B 凹孔により | |
| VI 隅丸三角形 | a 片面1. 点状痕 | |
| VII 方形 | b 両面2. 逆円錐状痕 | |
| VIII 不定形 | 3. 矩形状痕 | |

例 II A a + B + C b₂

楕円形の平面形を呈し、表裏面に磨面が残り、側面に敲打痕、表裏両面に逆円錐状の凹孔が施されている。

磨石分類表

No	分類	出土地	石質
4	II A a + C	E区 G6G	
5	I A a	I区 F3G	輝緑岩?
6	I A a	I区 F3G	安山岩
7	I A a	I区 F3G	安山岩
8	II A a	G区	安山岩
9	II A c + B a 1?	G区 Q7G	安山岩
10	II A a	G区 Q6G	安山岩
11	II A c	E区 G6G	安山岩
12	II B b 1 + 2	H区 N2G	安山岩
13	II A c	F区 R11G	安山岩
14	I A c		安山岩
15	IV A c	J区 E18G	
16	IV A c	J区	
17	II A a + B a 1	F区 S16G	安山岩
18	I B b 1 + 2	E区	安山岩

No	分類	出土地	石質
19	II A a + B b 1	G区	安山岩
20	V B b 1 + 2	E区 F7G	安山岩
21	III B b 2 + C?	E区	安山岩
22	II B b 1 + 2 + C	E区 I10G	安山岩
23	II B b 2	F区 F14G	安山岩
24	II B b 1	E区 H11G	安山岩
25	I B b 1 + 2	E区 D5G	安山岩
26	I A a + B b 1	H区	安山岩
27	I A a + B b 1 + 2	E区 J12G	安山岩
28	II A a + B b 2	G区 R8G	安山岩
29	II A d + B b 2	E区 E6G	安山岩
30	II A a + B b 2	E区 H10G	安山岩
31	I A a	E区 C3G	?
32	I A c	G区 R8G	安山岩
33	II A a + B b 1 + 2	E区 E6G	安山岩

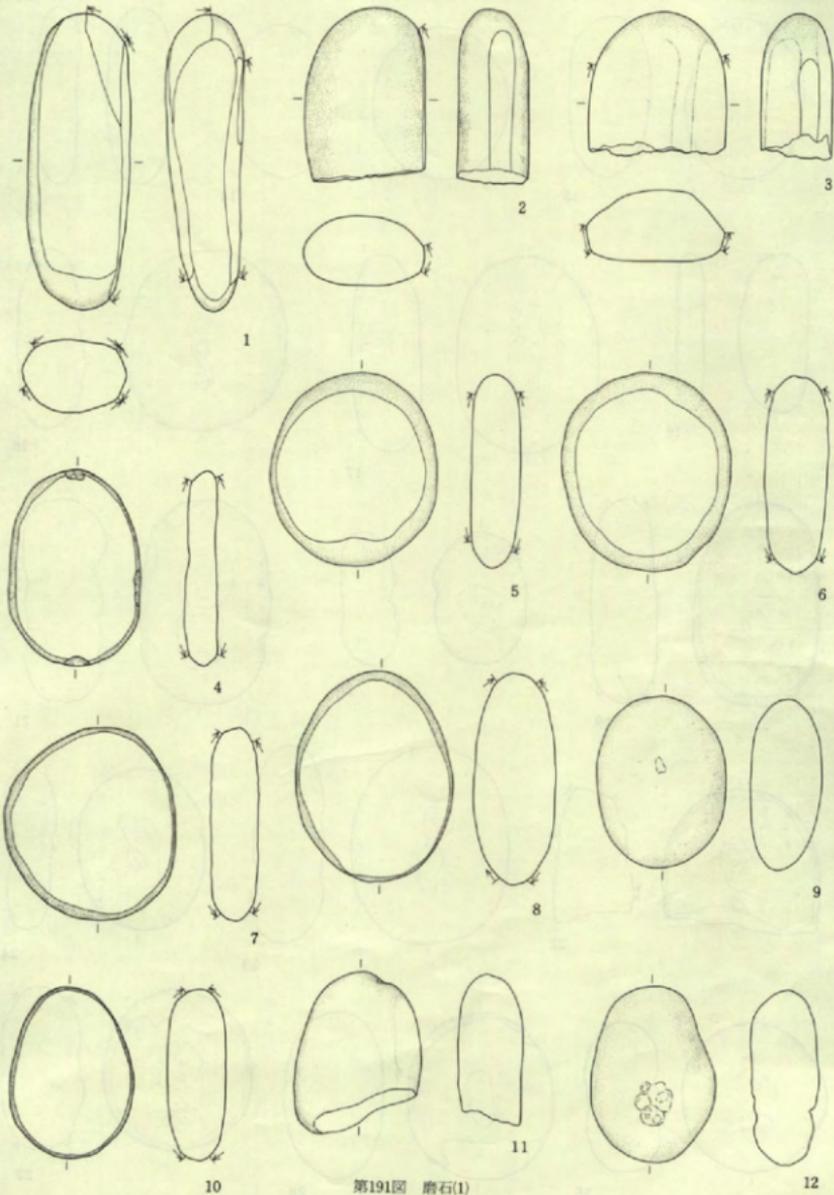
No	分 類	出 土 地	石 質
34	II B b 1 + 2	E区 D 5 G	安 山 岩
35	III A a + B b 1	E区 F 8 G	安 山 岩
36	II A a + B b 2	E区 D 5 G	安 山 岩
37	III B b 2	E区 I 7 G	安 山 岩
38	III B b 2 + C	E区 D 5 G	安 山 岩
39	III B b 1 + 2	E区 G 3 G	安 山 岩
40	V B b 2	E区	安 山 岩
41	I B b 2	E区 D 4 G	安 山 岩
42	V B a 2	不明	安 山 岩
43	III B a 1 + 2	E区 E 6 G	安 山 岩
44	II B a 1 + 2	E区 G 9 G	安 山 岩
45	II B a 2	E区 D 5 G	安 山 岩
46	II B a 2	E区 J 8 G	安 山 岩
47	VI B b 2	E区	安 山 岩
48	VI B b 1 + 2	G区	安 山 岩
49	VII B a 2	E区 H 8 G	安 山 岩
50	VIII B a 2	J区	安 山 岩
51	VIII B b 2	J区	安 山 岩
52	VIII B b 2	E区 D 5 G	安 山 岩
53	II B b 1 + 2	E区 G 8 G	
54	II B b 2	E区 C 4 G	安 山 岩
55	II A d + B b 1 + 2	E区 G 9 G	安 山 岩
56	II B b 1 + 2	E区 C 4 G	安 山 岩
57	VII B b 1 + 2	E区 D 5 G	安 山 岩
58	VI B b 2	E区 G 8 G	安 山 岩
59	VI B b 1	E区 D 5 G	安 山 岩
60	I B b 2 + C	L区	安 山 岩

No	分 類	出 土 地	石 質
61	VI B b 2	E区 J 9 G	安 山 岩
62	I B b 1 + 2	E区 D 4 G	安 山 岩
63	VIII B b 2	不明	安 山 岩
64	II B b 1 + 2	E区 P 9 G	安 山 岩
65	II B b 2	E区 E 6 G	安 山 岩
66	VIII B b 2	E区 P 9 G	安 山 岩
67	II B b 1	E区 H 10 G	安 山 岩
68	II B b 1 + 3	E区 J 9 G	安 山 岩
69	VI B b 1 + 2	E区 I 9 G	硬 質 砂 岩
70	VIII B b 2	E区 F 5 G	安 山 岩
71	VIII B b 1 + 2	E区 I 6 G	安 山 岩
72	VI B b 1	E区 D 5 G	安 山 岩
73	II B b 1 + 2	E区	安 山 岩
74	II B b 2	E区 H 6 G	安 山 岩
75	II B b 1 + 2 + 3	F区 R 13 G	安 山 岩
76	II B b 1 + 2	G区	安 山 岩
77	II B b 1	G区 F 6 G	安 山 岩
78	II B b 1 + 2	G区 P 9 G	安 山 岩
79	II B b 2	G区	安 山 岩
80	II B b 1 + 2	F区 Q 12 G	安 山 岩
81	II A c	H区 N 2 G	安 山 岩
82	I B b 2 + 3	H区 I 17 G	安 山 岩
83	VIII B b 1 + 3	J区	安 山 岩
84	I B b 2	J区	安 山 岩
85	VIII B b 1 + 2	E区	安 山 岩
86	VIII B b 2	E区 H 6 G	安 山 岩
87	I B b 2	E区 I 11 G	安 山 岩

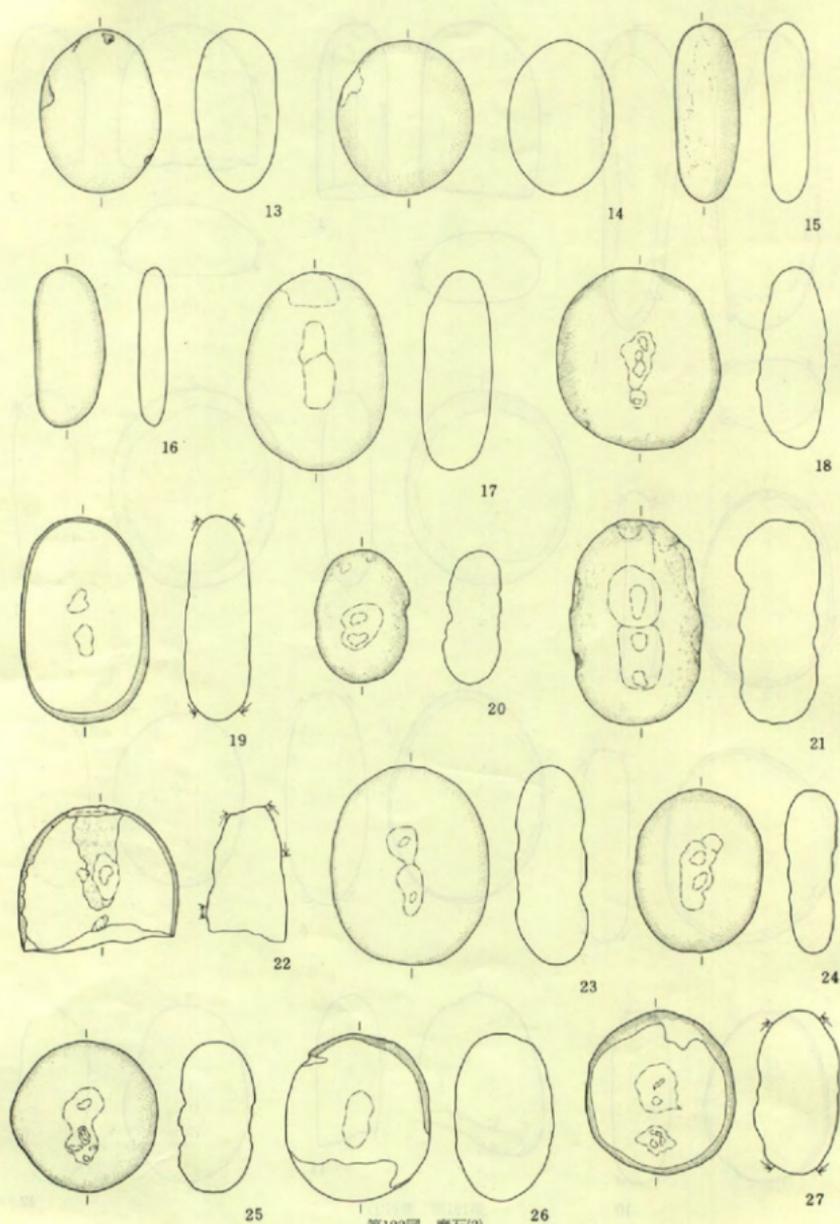
石 鍾 (第197図88)

88. 安山岩の両端を打ち欠く所謂礫石鍾で本調査区で唯一の出土品である。E区出土。

III 検出した遺構と遺物

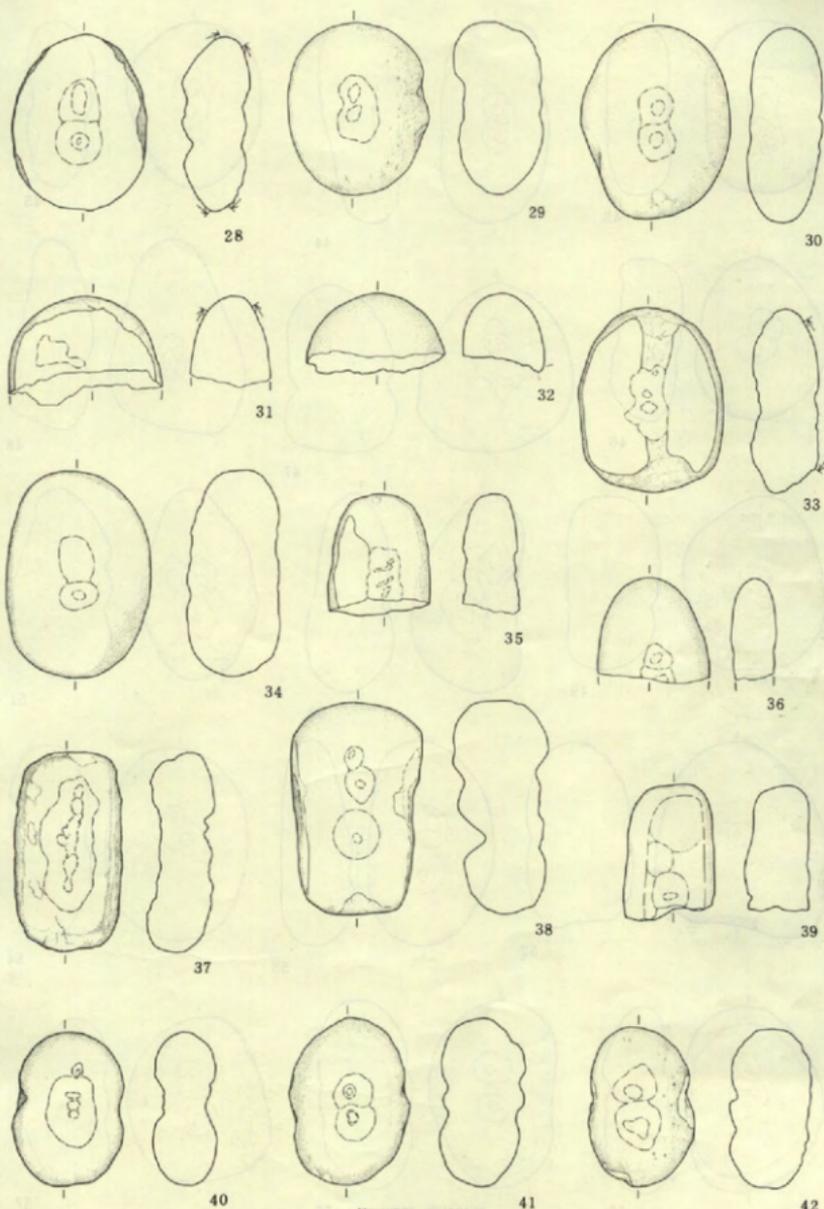


第191図 磨石(1)

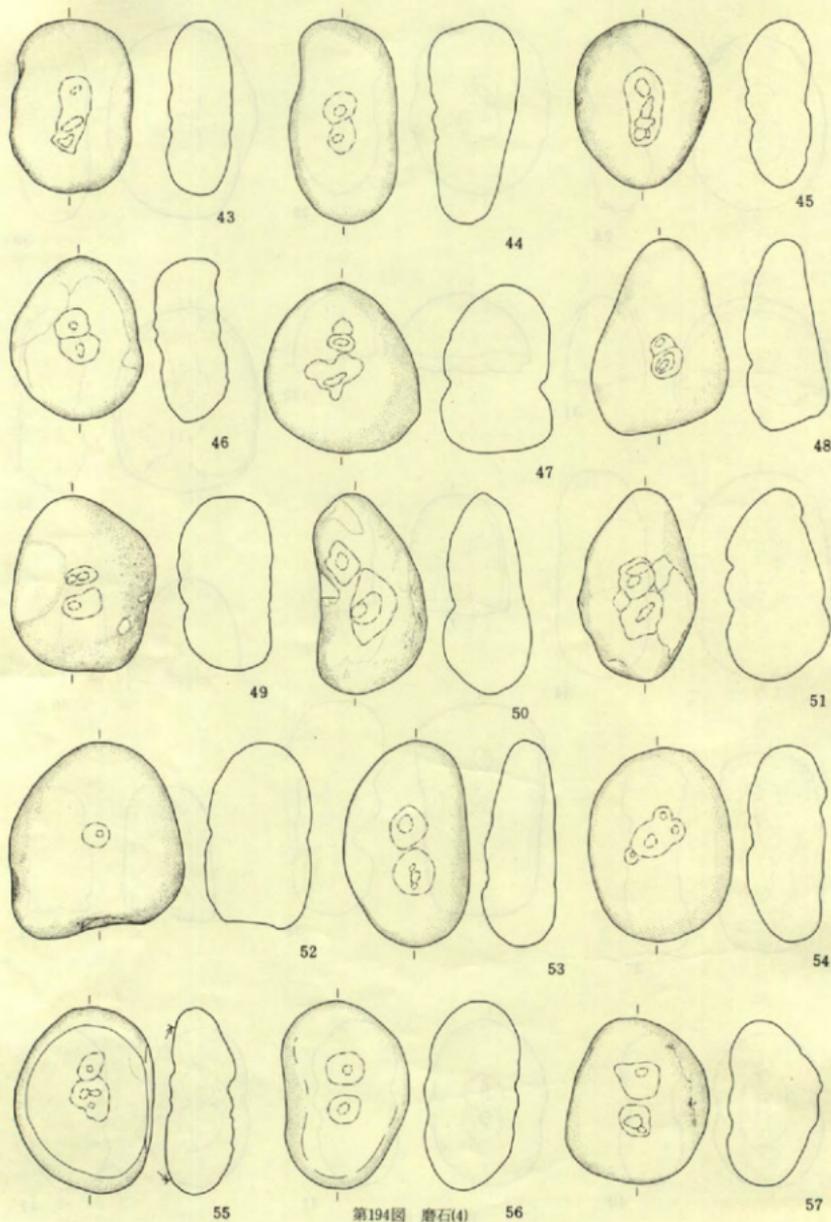


第192图 磨石(2)

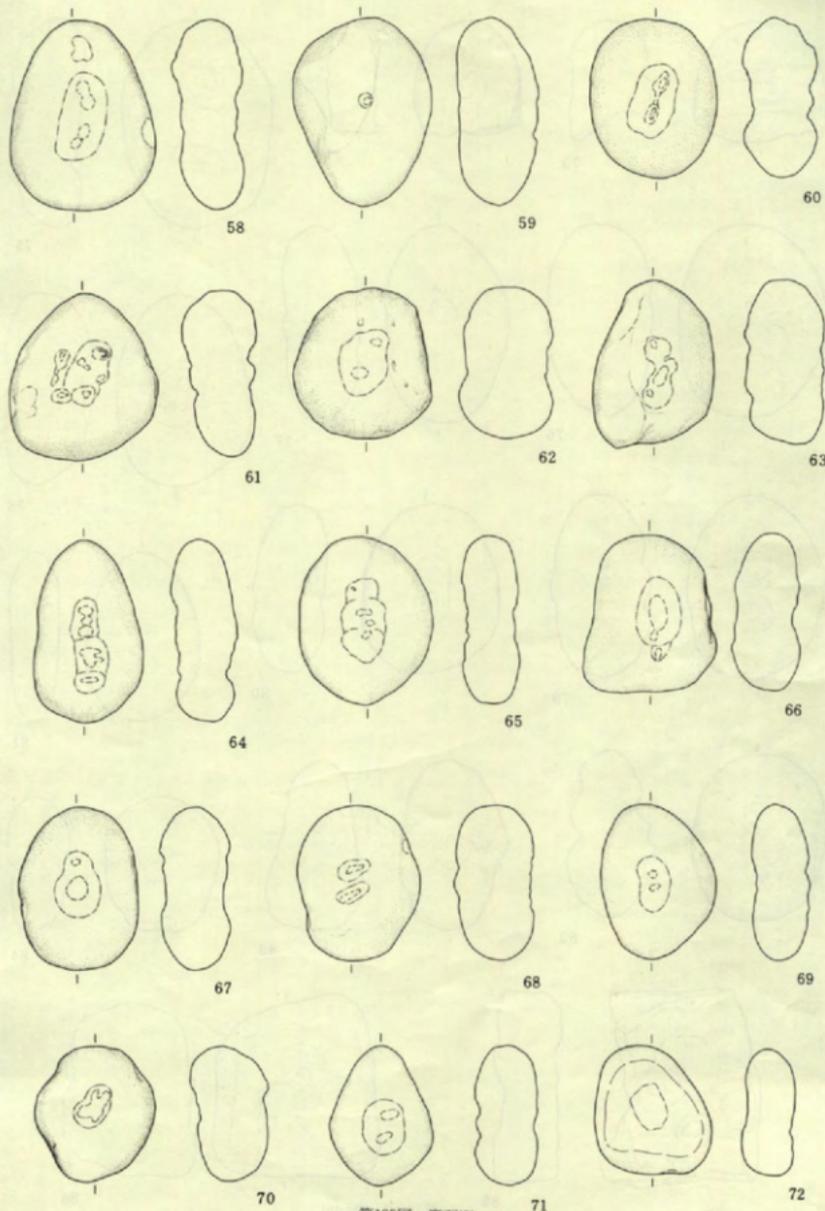
III 検出した遺構と遺物



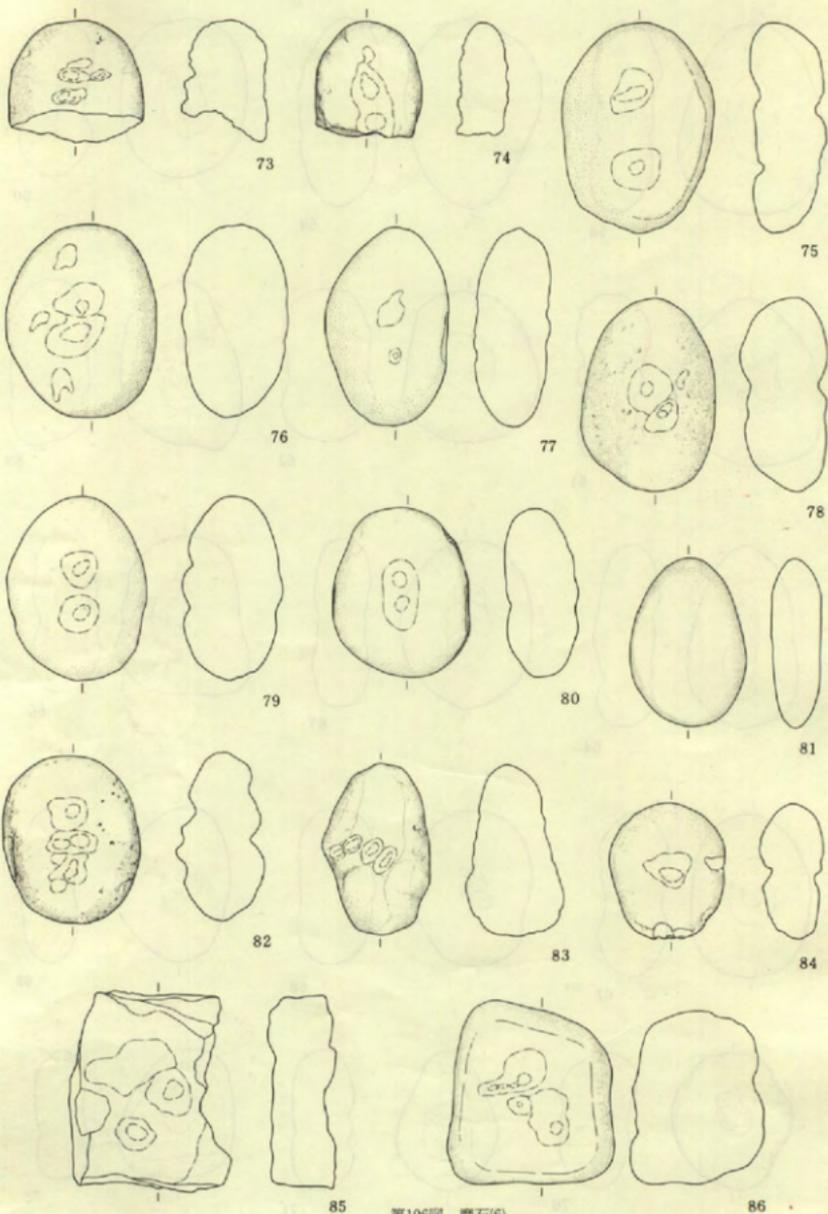
第193図 磨石(3)



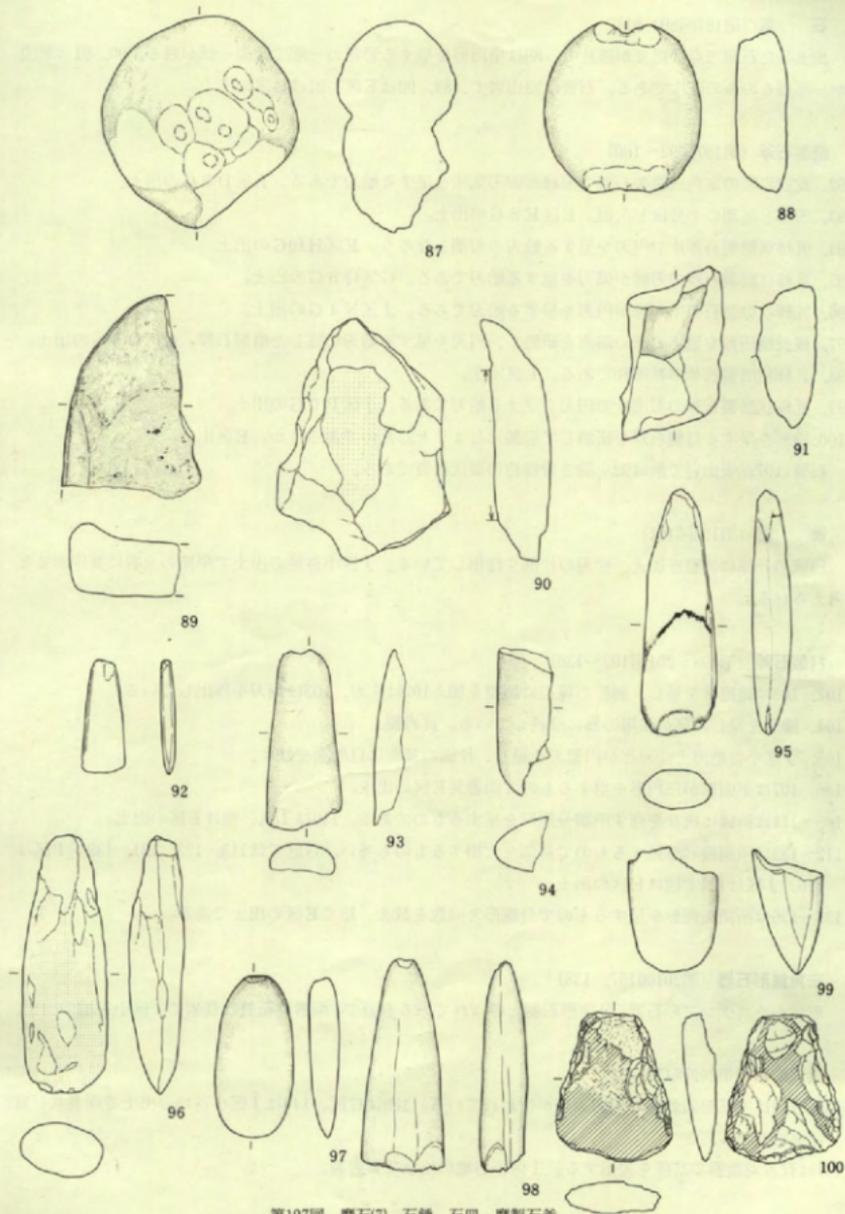
III 検出した遺構と遺物



第195図 磨石(5)



第196圖 磨石(6)



第197図 磨石(7)、石錘、石皿、磨製石斧

石 皿 (第197図89~91)

出土した石皿三点は総てが破片で、89は楕円形を呈する形状の一部で縁の一部が残る。90、91は磨面が一部残るのみの破片である。石質は安山岩で、89、90はE区、91はG区の出土。

磨製石斧 (第197図92~100)

92. 蛇紋岩製の定角式磨製石斧で刃縁が偏刃気味を呈する始刃である。E区D5Gの出土。
 93. 刃部と基部の半分ほど欠損。E区E5Gの出土。
 94. 乳棒状磨製石斧片で刃を呈する始刃の刃部となろう。E区H10Gの出土。
 95. 乳棒状磨製石斧で刃縁が偏刃を呈する始刃である。G区Q6Gの出土。
 96. 乳棒状磨製石斧で刃縁が円刃を呈する始刃である。J区N4Gの出土。
 97. 縦長楕円形を呈する礫の端部を研磨し、円刃を呈する始刃に施した磨製石斧。G区O6Gの出土。
 98. 乳棒状磨製石斧の基部片である。L区出土。
 99. 乳棒状磨製石斧の刃部片で円刃を呈する始刃である。J区P0Gの出土。
 100. 撥形を呈する打製石斧を研磨して磨製にしようとしたのであろうか。E区出土。
- 石質は97が安山岩で他は92を除き青緑色の凝灰岩質である。

礫 器 (第198図101)

円礫の一部に調整を加え、片刃の片部を作出している。J区小谷地の出土で早期の土器に共伴すると考えられる。

打製石斧 (第198~201図102~136)

- 102、103は靴篋状を呈し、剥片の周辺に調整を加え102は片刃、103は両刃を作出している。
104. 撥形を呈し刃部が使用の為に摩耗している。頁岩製。
105. J区小谷地出土。刃部が円鑿刃を呈し、片面の基部に自然面を残す。
- 106、107は平面形が三角形を呈するもので両者共E区の出土。
- 108~111は両縁に抉りを施す所謂分銅形を呈するものである。110はI区、他はE区の出土。
- 112~132は所謂撥形を呈するもので基部を欠損するものも多い。G区では113、123、131、132。I区は126。J区は124で他はE区の出土。
- 133~136は所謂短冊形を呈するもので分銅形と同数を数え、総てE区の出土である。

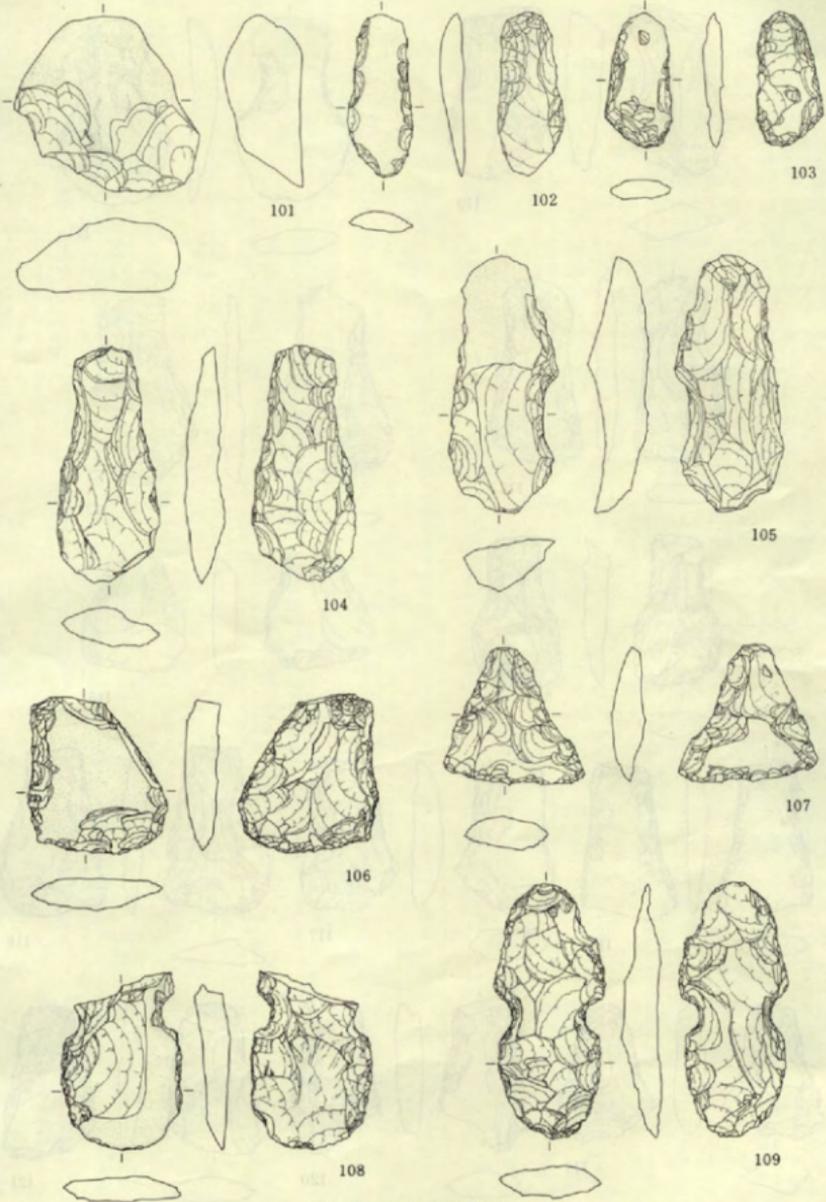
三角錐形石器 (第201図137、138)

形状からスタンプ形石器、凡字形石器と呼ばれているもので、両者共石質は頁岩でJ区小谷地の出土。

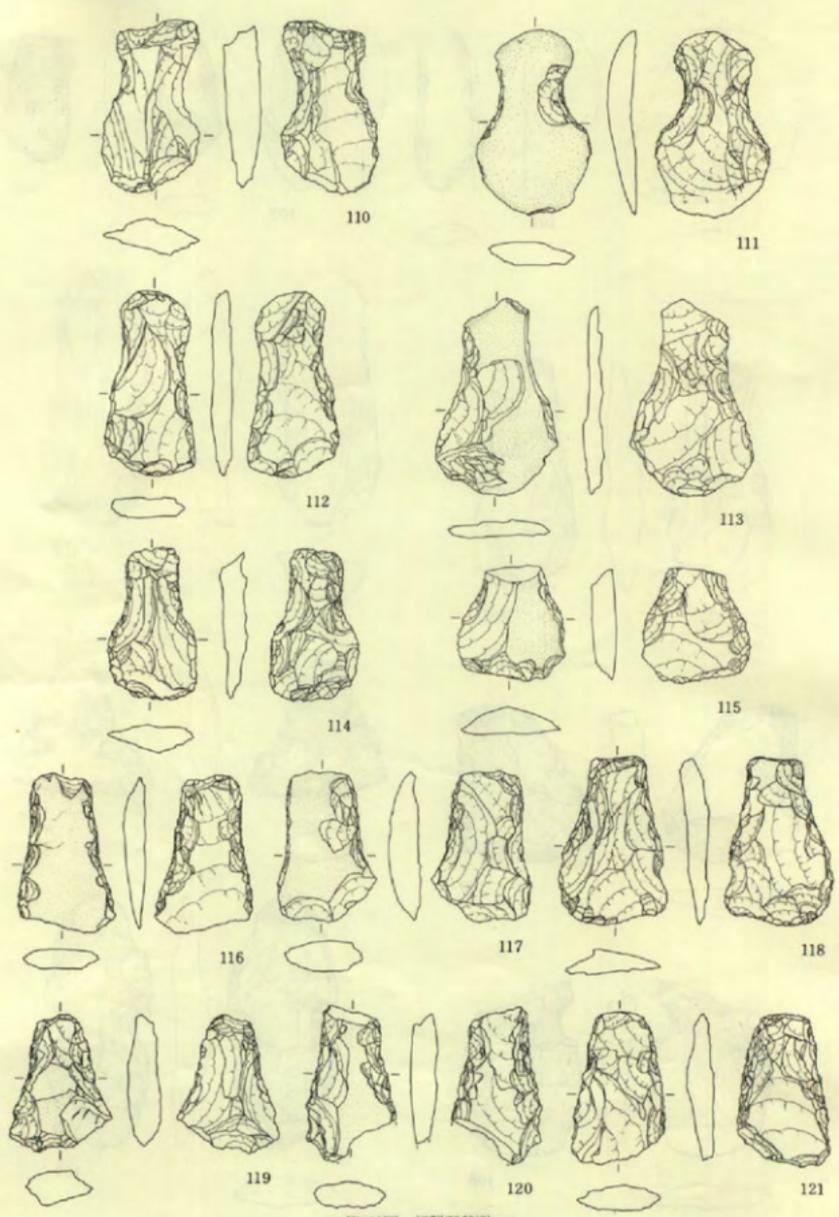
尖頭器 (第202図139~141)

- 139、140は木葉形尖頭器で両面調整が行われている。139はG区、140はJ区小谷地の出土で両者共石質は頁岩である。
- 141は有舌尖頭器で基部を欠損する。J区小谷地の出土で頁岩製。

III 検出した遺構と遺物

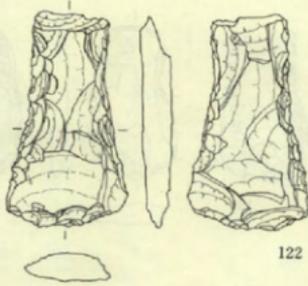


第198図 石器、打製石片(1)

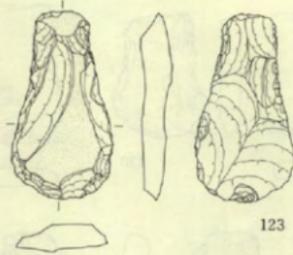


第199圖 打製石片(2)

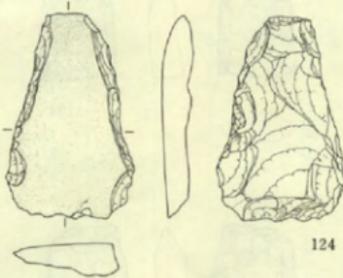
III 検出した遺構と遺物



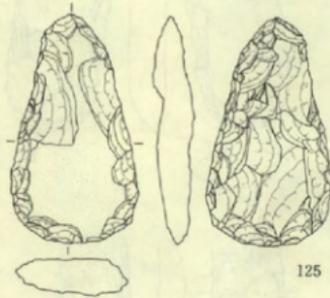
122



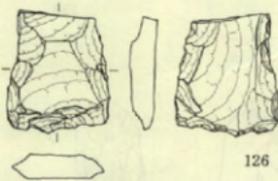
123



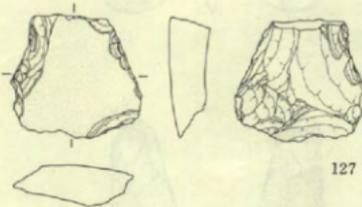
124



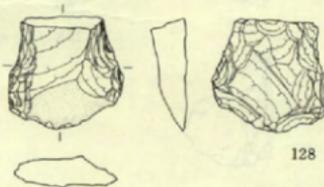
125



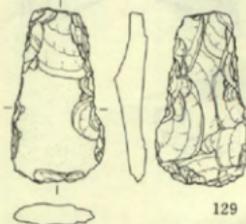
126



127

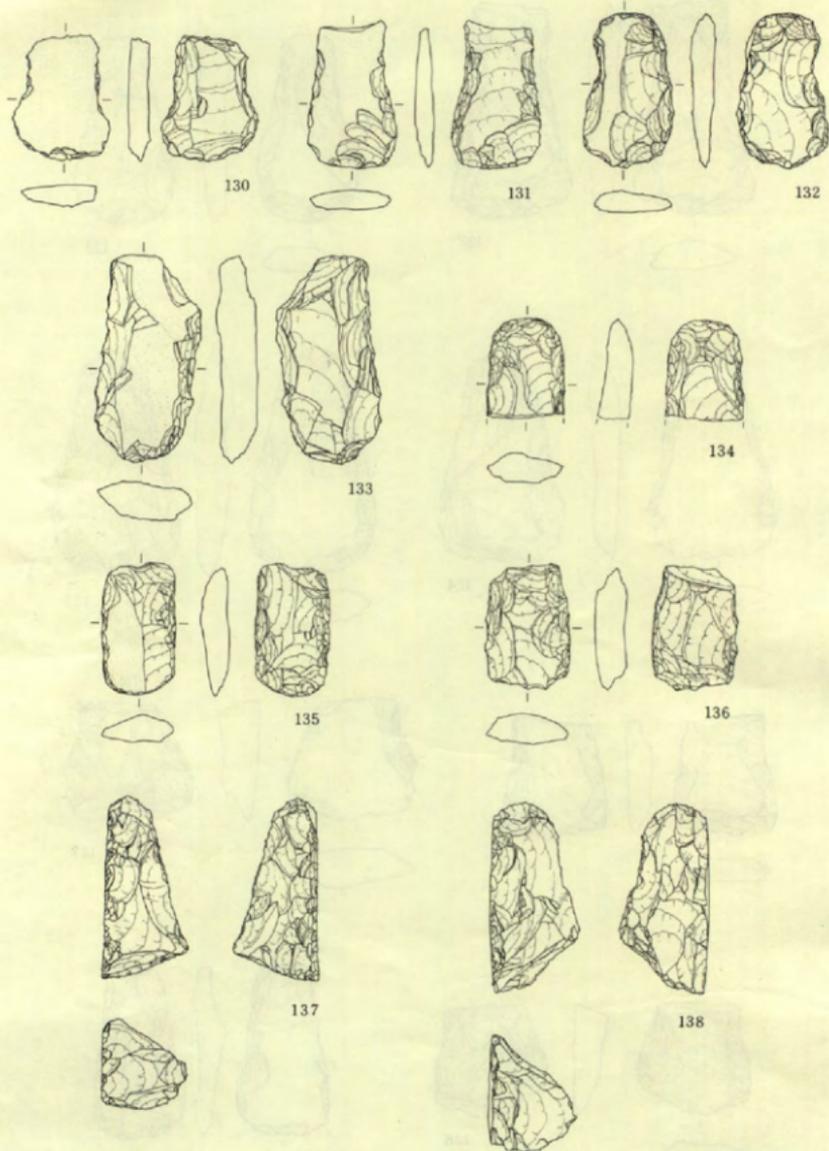


128



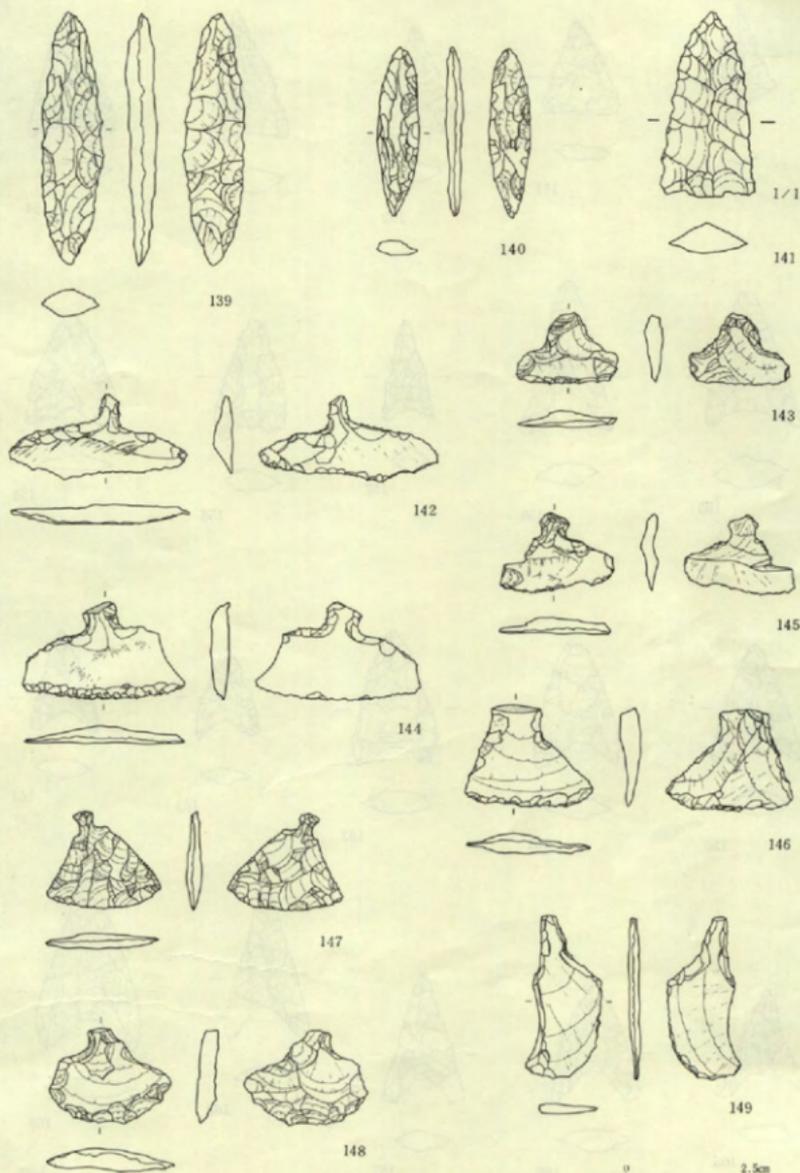
129

第200圖 打製石斧(3)

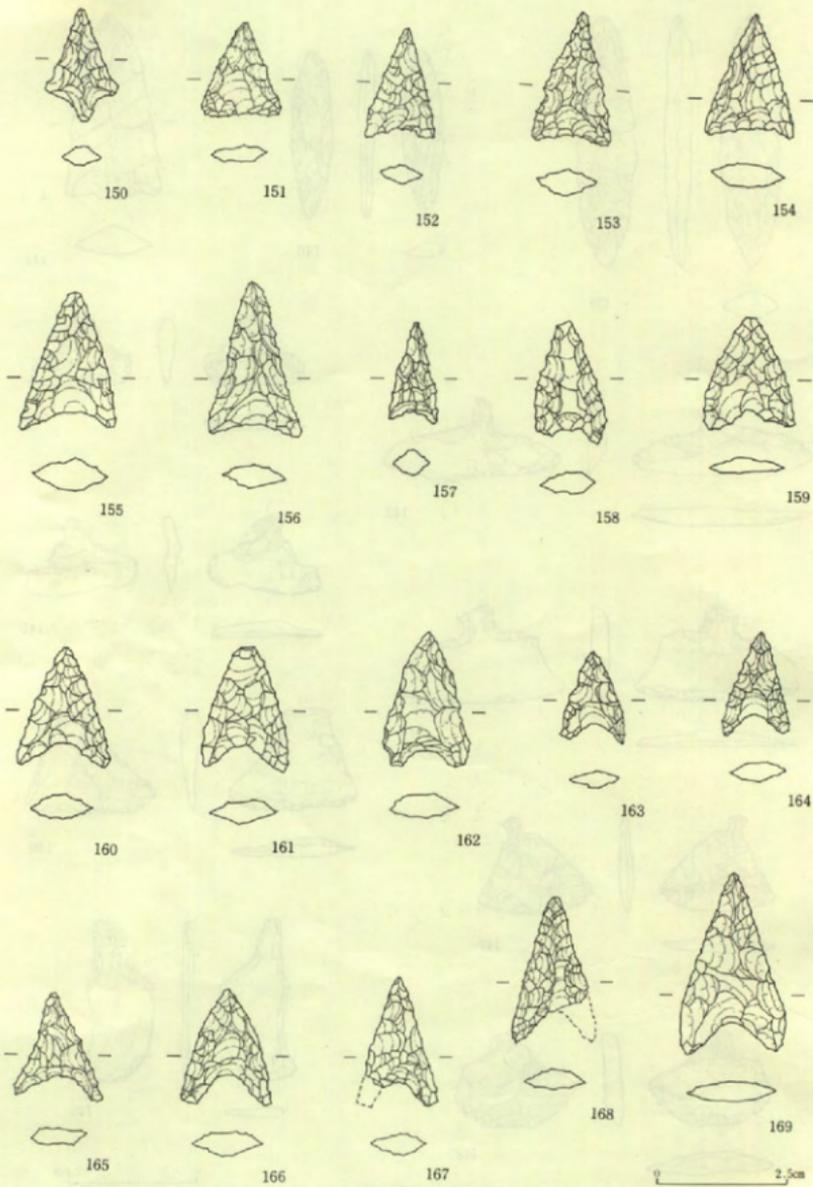


第201圖 打製石斧(4)、三角錘形石器

III 検出した遺構と遺物

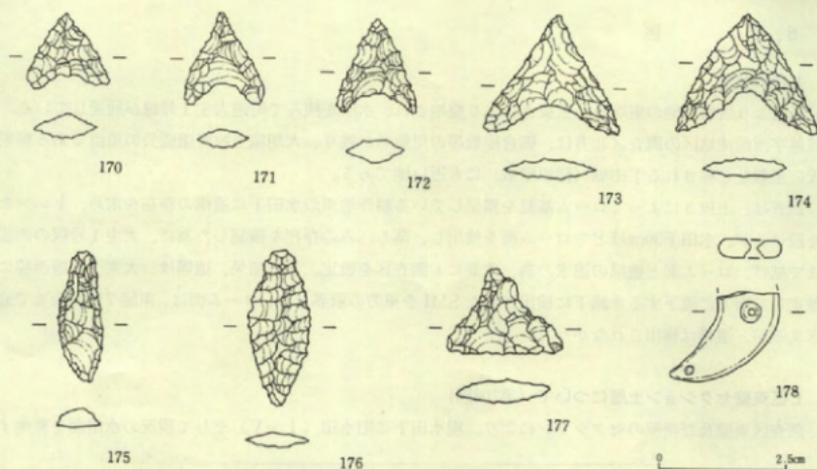


第202図 尖頭器、石匙



第203圖 石鏃(1)

0 2.5cm



第204図 石鏃(2)、ペンダント

石 匙 (第202図142~149)

142~148は横型、149は縦型で147は三角形を呈し石質は石英である。他の石質は総て頁岩である。142、146がJ区台地上、他はE区の出土。

石 鏃 (第203、204図150~177)

150は出土品唯一の有茎鏃で基部が突出する。G区の出土。
151~174は無茎鏃で151~154は基部が直線的気味、155~174は抉入のあるものである。
175は剥片鏃、176は木の葉形鏃、177は石匙形鏃である。

ペンダント (第204図178)

178、J区台地上の出土。角先状を呈し小孔を穿つ。石質は滑石である。